

## 高山房小林新兵衛の「唐詩選かるた」について

大庭 卓也

### 要約

中国明代の李攀龍撰とされる『唐詩選』中の絶句をかるたに作って遊ぶということは、中国では行われず日本独自の習慣である。これは、我が国においてこの唐詩総集がいかに親しまれていたかを示す現象であり、日本における『唐詩選』受容史のうえで看過できない研究課題である。しかしこれまで、高山房『唐詩選』関連書を独占して出版し続けた江戸の書肆）が売り出した「唐詩選かるた」について、十分な検討は加えられてはいない。よって可能なかぎり実物に即しながら、このかるたの種類、制作の経緯、刊行年時などを考察して、日本における『唐詩選』受容史の一端を明らかにしたい。

### キーワード

『唐詩選』、服部南郭、高山房小林新兵衛、漢詩かるた、割印帳、蔵版目録、『唐詩選画本』、橋石峰、鈴木芙蓉

### 一

近世期を通じて『唐詩選』の版權をもっていた高山房（屋号は須原屋。小林氏。代々新兵衛と名乗る）で「唐詩選かるた」が刊行されたのは、四代目の小林高英の頃であろう。筆者編『江戸人、唐詩選に遊ぶ』（久留米大学文学部創立二十五周年記念特別企画御井図書館貴重資料展示図録、平成二十九年、久留米大学文学部）に略述したとおり、このかるたは『唐詩選画本』（初編天明八年刊／七編天保七年刊）の副産物として誕生している。『唐詩選』を絵本にするという構想は、高英の祖父である二代目小林文由の頃からあり、書籍商高山房にとって代々念願の一大事業であったと言う（『画本』初編、小林高英撰「書画本唐詩選後」）。また『画本』初編で絵と詩の本文の揮毫を担当してこの事業の実現を後押しした橋石峰は、『小倉百人一首』が歌人の姿絵を添えることで人々に一層親しまれるようになったのと同様に、『唐詩選』を絵本にする必要を痛感していた人物であった（『画本』初編、橋石峰撰「画本唐詩選自序」）。こうした言葉に耳を傾けるならば、『画本』から「唐詩選かるた」が生ずることや、このかるたの最大のセールスポイントは、ようやく成し遂げた『画本』の絵を活かした絵入りという点であったことなどが自然に理解されるだろう。

このかるたに関する先行研究には、次のようなものがある。

イ 山口吉郎兵衛氏『うんすんかるた』

(昭和三十六年、私家版)

ロ 山岸共氏『江戸時代刊行唐詩選関係書提要(補訂稿)―江戸時代と唐詩選―』

(昭和六十一年、私家版)

ハ 船津富彦氏「古文辞派の影響―近世日本の唐詩選ブームを追って(唐詩選版本考)」

(『明清文学論』所収、平成五年、汲古書院)

ニ 村上哲見氏「『唐詩選』と高山房―江戸時代漢籍出版の一側面」

(『日本中国学会創立五十年記念論文集』所収、平成十年、汲古書院)

ホ 吉海直人氏「『かるた』資料としての出版目録」(『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』六、平成十八年三月)

ヘ 村上哲見氏「『唐詩選』の和語解・画本など」

(『中国文学と日本 十二講』所収、平成二十五年、創文社)

ト 吉海直人氏「板かるたの歴史―会津発祥説の検討―」

(『同志社女子大学日本語日本文学』二十五、平成二十五年六月)

チ 同氏「漢詩かるた」について」

(『同志社女子大学日本語日本文学』二十六、平成二

十六年六月)

しかし、先学たちの努力にもかかわらず、高山房のかるたの全容は明らかではない。何故なら、第一に実物の搜索が充分ではないからである。先行研究のうち、実物に言及するのは山口氏と吉海氏のみ。しかし両氏とても数種ある高山房のかるたの一部分しか見ておられない。第二に、割印帳や書籍目録などの出版資料のみで論じているからである。これらの文献には曖昧な記載が多く、時に出版物との照合が求められるが、それをしないがためにしばしば誤解を生じている。ただこうした研究上の問題点にはやむを得ない一面もあり、そもそも残る高山房のかるたの数が豊富ではないのである。私はこのかるたの売れ行きは、さして芳しいものではなかったと考えている。

従って、本稿では出来るかぎり実物に即した考察を目指しておきたい。また焦点を絞るために、高山房以外の本屋によって刊行された、あるいは各地で作られ続けた肉筆の詩かるたは考察の範囲から外しておく。早速、高山房の「唐詩選かるた」の種類を整理するところから始めよう。

## 二

江戸の本屋仲間が作成した出版申請の記録である割印帳

(朝倉治彦氏・大和博幸氏編『享保以後江戸出版書目』、平

成五年、臨川書店)に、高山房の「唐詩選かるた」が見えるのはただの一箇所。

天明七末十二月

唐詩選かるた

全百枚

板元売出し

小林新兵衛

七言絶句五十首

すなわち天明七年十二月に出された申請で、『唐詩選』の七言絶句五十首を扱ったかるたである。先行研究の(へ)村上論、(ホ)(ト)(チ)の吉海論では、これをもって高山房のかるたが天明七年には刊行され、流通していた証としておられる。だが、高山房のかるたを『画本』の副産物と考える私は、そう考えるのにはためらいを覚える。天明七年十二月と言えば、まだ『唐詩選』の五言絶句を絵解きした『画本』の初編すら刊行されていない。その出版申請が記録されるのは翌天明八年十二月のところである。まして七言絶句を絵解きにした『画本』の二編と四編は、さらに遅れて寛政二年と寛政四年の刊行。すなわち天明七年の時点では、高山房は『画本』の絵をかるたに全く活用できないのである。苦勞の末にようやく刊行した『画本』を捨てて、それも七言絶句の『画本』を作らないうちに、はたして高山房が七言絶句のかるたを刊行するものかどうか。(チ)吉海論においても、右の割印帳の記載と『画本』初編の刊行が近接することに触れ、高山房のかるたは『画本』とほぼ連動して売り出されたものと述べておられるが、以上のようなかるたの申請と『画本』の刊行のずれをどのように

考えておられるのだろうか。余りに大まかで、厳密な指摘ではない。

次第に述べてゆくように、七言絶句五十首の高山房のかるたは、現品はもちろん右の割印帳以外の文献のうえにも確認できない。かつて、高山房の服部南郭校訂『唐詩選』の諸版の調査を試みたときに(「和刻『唐詩選』出版の盛況」、東アジア海域叢書十二『蒼海に交わされる詩文』所収、平成二十四年、汲古書院。のち改稿して前述した筆者編の図録に付載)、実存する本と割印帳の記載がこれほど合致しないものかとつくづく驚いた経験もある。私としては、この七言絶句五十首のかるたの申請記録は、やはり何らかの事情で未刊に終わったものであり、高山房内で『画本』とほぼ同時期に、かるた出版の企画が持ち上がったことを示唆する資料と考えるべくよりほかはない。

割印帳の記載にいまひとつ信頼がおけないとなれば、次に高山房の広告や蔵版目録の類に目を移そう。まず高山房の出版物に付される広告。奥付の余白を利用したり、本文に続けて多いものでは数丁にわたって綴じ込んであったりする、自店の既刊や近刊書の宣伝である。これは現代と同様に、多くの場合は出版物の内容に添った広告を載せる。和歌の書物ならば歌学関係の広告が付き、漢詩の書物には詩学関係の広告を付けるというように。よって「唐詩選かるた」の広告は、南郭校訂の『唐詩選』の各種版式、すな

わち私に呼ぶ小字素読本、無点本、四声片仮名付本、大字素読本、平仮名付本などをはじめ、漢文や仮名による種々の注釈書や石摺本などに見られるということになる。そこで試みに、手許にある高山房の『唐詩選』の関連書をすべて点検してみると、かるたは次の二様に宣伝されている。

「同(唐詩選) 絵入、詩かるた 箱入」  
 「同(唐詩選) 詩かるた画入、五言絶句 箱入」

七言絶句 全 「」

これらの広告がそれぞれいつ頃から現れるのかについては、後にかかるたの刊行時期を考える箇所に述べることにし、今はとりあえず、傍点を付けたように、やはり絵が入ることをセールスポイントとしていた点、五言絶句と七言絶句のかるたを刊行していた点、箱に入れて売られていた点などを確認しておこう。ただこれだけでは、先の割印帳に記載されていたように何首の詩を扱ったものなのかまでは知られない。

こうした不足を補うために、時代は降るが明治に入って編まれた二つの高山房の蔵版目録を用いておきたい。これらは、広告のように自店の出版書をかいつまんで宣伝するのではなく、現在の出版各社でも作られている出版総合カタログのようなものである。明治の新刊書に加え、江戸時代に彫刻した版木で増刷できる書物も一覽されているので、この際便利である。一つは先行研究(二)の村上論でも参

照されている明治八年刊行の『高山房蔵版目録』(『書誌書目シリーズ』<sup>⑫</sup>近世後期書林蔵版書目集)所収、ゆまに書房、昭和五十九年)である。特に区分は設けず、おおよその内容ごとに発売書籍を十八丁にわたって列挙した、整版で横本というまだ江戸の名残のある目録。『唐詩選』の関連書は冒頭に置かれ、南郭校訂『唐詩選』の各種、注釈書類に続いて、

同(唐詩選) かるた五言五十首 箱入

同 七拾四首 同

同 七言七十首 同

同 百首 同

と見える。もちろん五言も七言も絶句。それぞれの詩型に詩数を異にする二種があり、合計四つの形式のかるたがあったことが知られる。

もう一つ別に所見の目録は、更に降って明治二十四年の刊行の『高山房発兌書目』。奥付に『印刷雑誌』第八号附録とある。この雑誌は、日本で最初の国産洋装活版本『改正西国立志編』を刊行した秀英舎の創業者佐久間貞一らが創刊した業界専門誌で、高山房はその発行人となっている。全体を二十四の部門に分類し、新刊書の多くには詳細な説明も付き、高山房の蔵版目録としては最も詳しいものではないか。全九十三頁、中本の洋装活版本。表紙には、合田清の写真木版工房生巧館による高山房の店頭風景の図



指摘を活かせていない。しかし、それだけに熱を込めて捜索できたことも事実であって、これまでこの形式のかるたで見出したものは、大牟田市立三池カルタ・歴史資料館蔵品、久留米大学御井図書館蔵品（平成二十三年度に購入）、東京の中野区立歴史民俗資料館蔵品および個人蔵品の四例に達する。高山房の各種かるたのなかでは残存例が飛び抜けて多く、最もよく売れたのがこの形式であったと思う。おそらく今後も更にいくつかは現れよう。

山口、吉海両氏の報告と重複するところもあるが、最も原状を保つと思われる中野区立歴史民俗資料館蔵品によって改めて書誌を述べておく。読み札、取り札各七十四枚、縦八・一糎、横五・六糎。裏貼の紙は薄縹色<sup>うすはなだ</sup>。賀茂真淵や本居宣長ら国学系の版本の表紙によく用いられるような、落ち着いた水色である。近世期に刊行された詩かるたの裏貼の紙は、ほとんどがこの色である。読み札は、画面をほぼ二等分にして（大半の札は霞をかたどった線を真ん中に引く）、上に詩題、作者の名そして起句と承句を四・四・二の字配りで三行に記し、下に絵を置くという構成で統一される。取り札は、転句と結句を三行に書き、四・四・二か、三・四・三ないしは四・二・四の字配りを交えて変化をもたせている。

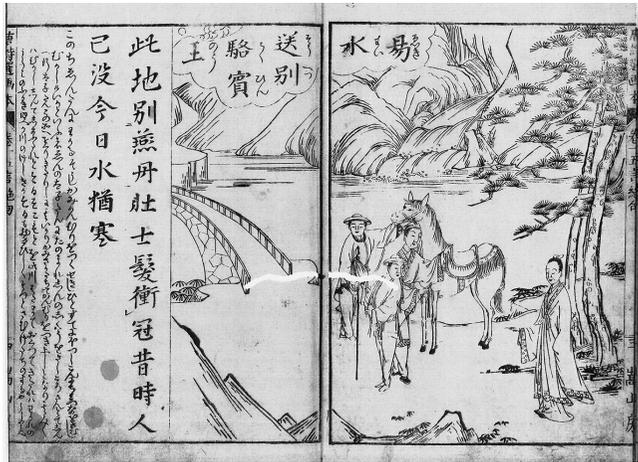
読み札と取り札にはそれぞれ専用の包紙がある。縦八・〇糎、横二十八・九糎の带状の紙で、真ん中に札の山を置

いて左右からぐるりと包むようになっていた。桜花の地模様と、正面にくる部分（包紙の右端に当たる）の飾り枠は水色、枠内の印「唐詩選加留多」（読み札の包紙）、「五言絶句」「高山房」（取り札の包紙）は朱色の二色刷り。先に見た『高山房発兌書目』にもあったとおり、箱の材質は桐。蓋を閉めた状態の外寸は、縦十・二糎、横十三・六糎、高さ八・五糎。蓋の天板は盛付<sup>もっつけ</sup>（かまぼこ型に丸みを付ける仕様）に仕上げられていること、箱の身の内側中央に仕切りの棧が渡してあること（はめ込まれるだけで固定されてはいない）、蓋と身の左側合わせ目に一糎四方の「高山」の朱文印が捺されること、などが特徴である。実見した四例のうち、包紙と元箱が備わるのは中野区立歴史民俗資料館所蔵品のみで、その写真は前述の図録の参考図版34-1・2に載せておいた。

次に読み札の絵に目を移してみる。先行研究の（チ）吉海論において『画本』との関連が大まかに指摘されていたが、具体的に比較してみると、かるたは「ことごとく『画本』初編の絵を踏襲している。小さなかるたの札、それもその下半分という狭い画面に、半紙本の見開きで一図をなす橘石峰の絵を移すためには、

### 第三、駱賓王「易水送別」の札

『画本』の画面右半分の一部を切り取り、背景の流水、馬を曳き荷を担う二人の従者を省く（図一参照）。



(図一) 左：五言絶句かるた第3 (久留米大学御井図書館蔵)

右：『画本』初編卷一3ウ・4オ「易水送別」(同所蔵)



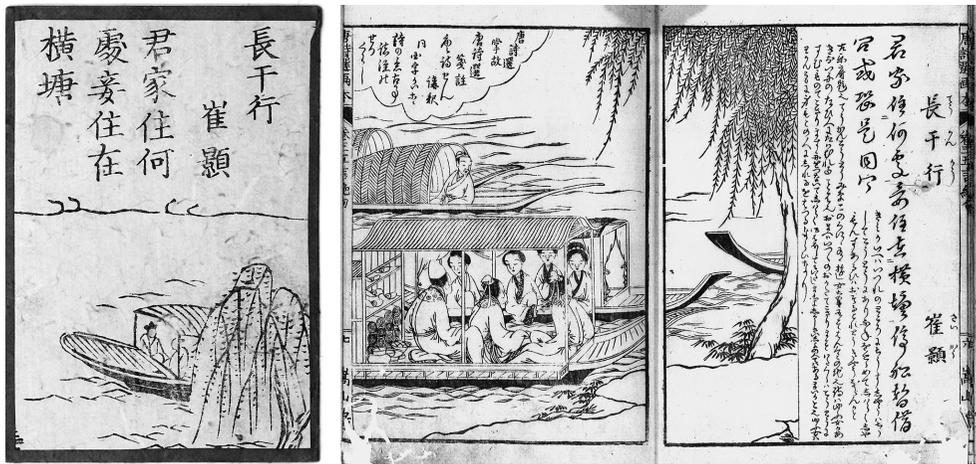
(図二) 左：五言絶句かるた第4

右：『画本』初編卷一4ウ・5オ「贈喬侍御」

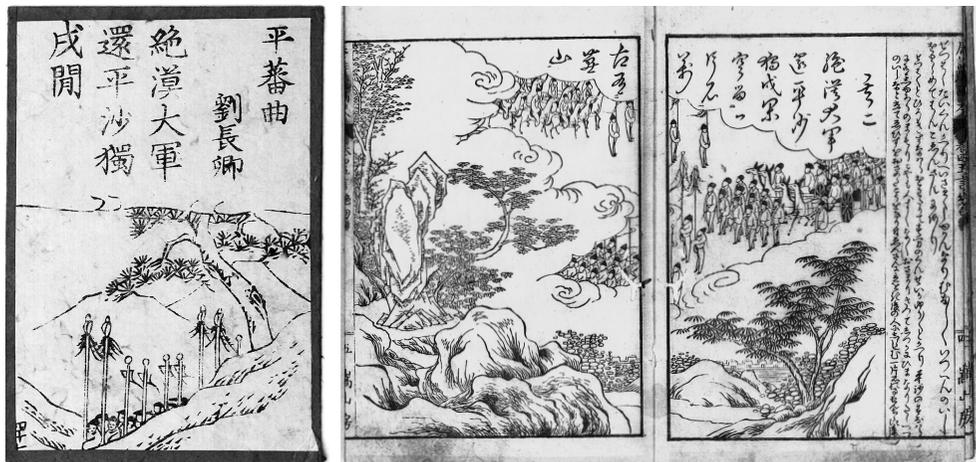


(図三) 左：五言絶句かるた第8

右：『画本』初編卷一8ウ・9オ「蜀道後期」



(図四) 左：五言絶句かるた第35 右：『画本』初編卷三6ウ・7オ「長干行」



(図五) 左：五言絶句かるた第47 右：『画本』初編卷四4ウ・5オ「平蕃曲 其二」



(図六) 左：五言絶句かるた第57 右：『画本』初編卷四14ウ・15オ「和張僕射塞下曲」

第四、陳子昂「贈喬侍御」の札

『画本』から、松の木と喬侍御の行列を切り取る。馬車を画面からはみ出させ、下に霞を置くことで複雑な描線を削ぐ(図二)。

第八、張説「蜀道後期」の札

『画本』の画面左半分を切り取り、背景の山並み、手前の土坡、従者の二人を省く(図三)。

第二十二、崔国輔「少年行」の札

『画本』の画面右半分を、ほぼそのまま切り取る。

第二十七、儲光羲「長安道」の札

『画本』の右画面を切り取り、背景の山、樓閣中の人物を省き、左画面の柳を手前に置いて複雑な描線を削ぐ。などの札に見られるように、あれこれ工夫を凝らして『画本』の絵を簡略にする必要があった。どうしても略化しにくい場合には、第三十五の崔顥「長干行」、第四十七の劉長卿「平蕃曲 其二」、第五十七の盧綸「和張僕射塞下曲」の札のように、『画本』から離れて描いたために何とも味気ない図柄になってしまっている例もある(図四～六)。しかし大多数の札においては、『画本』初編の絵を小画面に活かす努力が払われており、高山房の「唐詩選かるた」が『画本』から派生したことをよく示しているようだ。

四

そして保留しておいた(1)五言絶句五十首全百枚の形式のかるた。これについては、先行研究の(へ)村上論において、京都の銭屋善兵衛と江戸の西村源六が安永二年十二月二十五日に連名で出版申請した「唐詩絶句軽多 五言五拾首」の版木を、高山房が後に譲り受けて自店から出版したものではないかという指摘がある。銭屋のかるたは読み札、取り札に片仮名で読み仮名をふっていたと見えて割印帳の記載には、

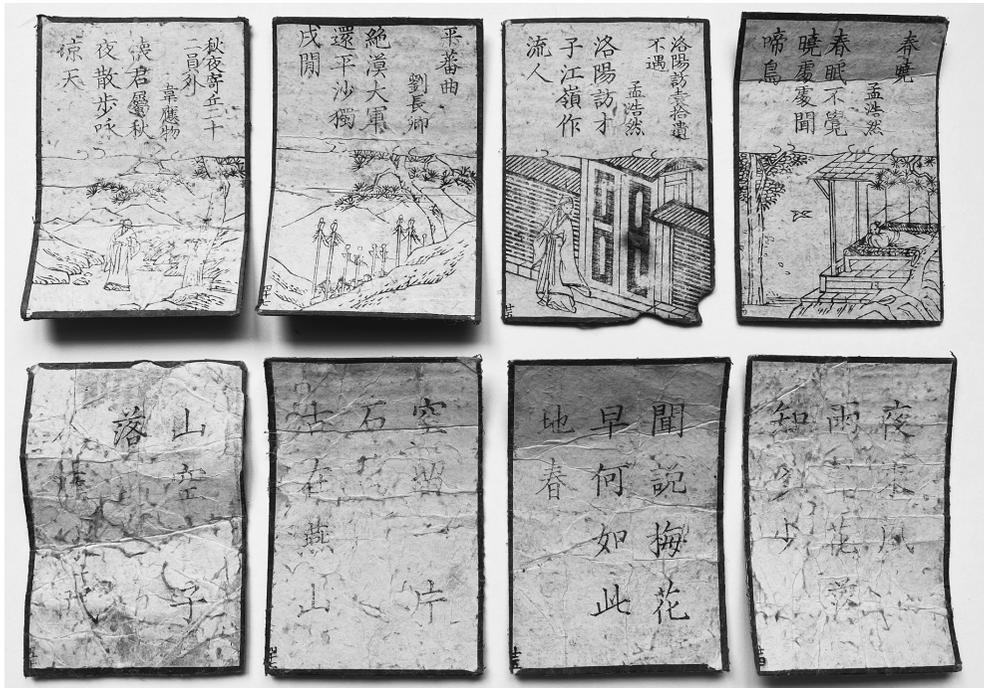
唐詩絶句軽多 五言五拾首 板元 京 銭屋善兵衛

売出し 西むら源六

右之書、須原屋新兵衛方片カナ付唐詩選ニ差障り候ニ付、記文を除売出申候筈也。以来、右之後篇出来候へ共、片カナ付ハ相除、双方相对致得心、割印出申し候。と、高山房が自店の『唐詩選』片仮名付本の類似出版として異議を申し立て、読み仮名を除くという条件で申請を許可したという注記がある。村上氏は、他処で出版されたものに高山房が訴えを起こして版木の譲渡を求めた書物がいくつかあることから、この銭屋のかるたもそうした例と見て、先に見た明治八年の『高山房蔵版目録』の「同(唐詩選)かるた五言五十首」に該当するものと考えておられるのである。

筋が通った指摘だが、私は近世期における高山房のかるたの広告に、絵入りである点が必ず書き添えられていたことをやはり注視しないではいられない。同時にまた明治八年の段階まで商品として扱われていた旧時代の版が、明治二十四年の『高山房発兌書目』においては多くが削除、すなわち絶版の対象とされていることにも注意を払っておきたいと思うのである。第一に『蔵版目録』で「唐詩選小本一（冊）／同 古版 一（冊）」などと「古版」と記される、近世期に彫刻された版。第二に明治に入って改正版を刊行した書物の旧版。これらはみな『発兌書目』では削除されている。そして近世期に他処から版木を譲り受けて版權を獲得した書物も、ままこうした例と同様に目録から外されているのである。新井白蛾著『唐詩見訓』（宝暦九年序刊）、服部南郭編『唐詩事略』（宝暦十年刊）、田島養元校訂『頭書唐詩選』（享和二年刊）など。これらは明治の半ばには版木が摩滅したり、時代の要請に合わなくなったりしたために整理されたのであろう。すでに提示したように、明治八年と二十四年の二つの蔵版目録でかるたの記載は一切変わっていない。仮に村上説のとおり、『蔵版目録』の「同（唐詩選）かるた五言五十首」が錢屋のかるたとして、安永二年の古版が削除されずに明治二十四年の『発兌書目』に依然として残っているのは、以上のような状況から考えて不自然ではあるまいか。

私はやはり実物に即して、この五言絶句五十首のかるたは前節で述べた七十四首のかるたの五十首目までをひと揃いにしたもの、すなわち（1）の形式は（2）の形式の縮小版であると考えたい。所蔵例は今のところ、架蔵のもの以外に知らないもので、まだ断定は控えて仮説としておこう。これは数年前、七十四首を大幅に欠く不揃品として売られていたもの。札の損傷もいちじるしく、買った当初は粗雑に扱われてきたために多くの札が失われたかなどと安直に考えてしばらく放っておいたのだが、後日改めてみると読み札、取り札ともに丁度五十枚、それも原『唐詩選』巻六の第一首目の賀知章「題袁氏別業」から、第五十首目の韋応物「秋夜寄丘二十二員外」までのひと続きである。どう考えても読み札と取り札の後ろ二十四枚が均等に散逸するというのは奇妙であり、これははじめから読み札、取り札五十枚ずつのかるたであったと考えるのが自然であろう。ならば、痛々しいまでの札の傷みは何を意味するのか。ここで思い合わされるのは、近世期には各地で行われ、現在では三重県桑名地方に残る、いわゆる漢詩かるたのことである。文政年間に藩主松平定信が当地へ伝え、戦前までは旧藩士を中心に盛んに遊ばれていたという。当時を知る古老は、正月になると毎晩かるたを戦わず朗吟が家々から聞こえたことや、多勢が車座であるいは源平二軍に分かれて競い合い、取った札を膝の下にしまうまで奪い合うとい



(図七)

う勇壮な遊びであったことなどを思い出深く語っている(長谷川健二氏「詩かるた」について)、三重県郷土資料叢書第十六集『桑名の無形文化財「詩かるた」』所収、昭和四十四年、三重県郷土資料刊行会)。桑名の風習を高山房のかるたに無理に結び付ける必要はないが、ここまで使い古された高山房のかるたを目撃するのは初めてである。取り札はどれも紙が毛羽立つほど擦れて文字が消えかかり、縦に横に深く折り曲げられたもの、焦げ跡が付くものまでがある。これらを眺めていると、高山房のかるたが桑名の風習のように遊ばれることもあったという、生活史的な資料のようにも見えてくる(図七)。書誌は述べるまでもないが、読み札、取り札各五十枚。札の寸法と裏貼りの紙は(2)の形式のかるたに同じ。元箱と包紙はもちろん失われ、蓋がないあり合わせの桐箱に札が裸のまま入れられている。

## 五

残るは(3)七言絶句七十首全百四十枚、(4)七言絶句百首全二百枚の形式。現在、(3)は三例の所在を確認しているものの、残念ながら(4)はまだ現品を見出す機会に恵まれない。ただ、五言のかるたにおける推測をここへもあてはめれば、(3)は(4)の一部ということになる。『唐詩選』に収録される七言絶句(巻七)は百六十五首。(4)

の形式のかるたで最大取り上げる百首という数は、その約六割に当たる。百首の選び方は、次に述べる(3)の形式のかるたの順番からも推測されるように、『唐詩選』巻七における配列順に百首を取っているのだろう。それぞれが取り上げる詩で具体的に言えば、左の通りとなる。

(3) ∷ 王勃「蜀中九日」から杜甫「解<sub>レ</sub>悶」までの七十首。

(4) ∷ 王勃「蜀中九日」から韓翃「送<sub>三</sub>客知<sub>二</sub>鄂州」までの百首。

また『画本』との関係を考えておくと、『画本』の七言絶句の部は二編(寛政二年刊)と四編(寛政五年)。やはり原『唐詩選』巻七の配列通りに、二編で七十七首を、三編で残りの八十八首を絵解きにしている。ということとは、(3)の形式のかるたは『画本』二編の第七十目までの絵を、そして(3)を包含する(4)の形式のかるたは『画本』二編のすべてと四編の第二十三目までの絵をもとに作られていると、一応は推測されよう。(4)のかるたを实見しない今、(3)のかるたを観察して、以上の推測を補強しよう。

これまでに見出せたのは、久留米大学御井図書館蔵品(平成三十一年度に購入)、架蔵のもの、それに神戸女子大学・神戸女子短期大学須磨キャンパス図書館にも一本が所蔵されることを、同図書館のホームページにおける平成二十九

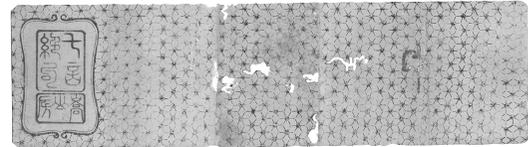
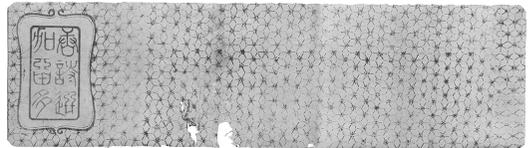
年度の展示紹介記事によって知った。以上、合計三例。原状を保つ架蔵品によって書誌を記す。読み札、取り札各七十枚、縦八・一糎、横五・六糎。薄藍色の裏貼。読み札は、詩題、作者の名、起句と承句などの余白に絵を置いたような画面構成で、文字と絵を整然と区分した五言かるたとは趣が違っている。取り札における転句と結句の書き方も一風変わっており、一見みな四行に書いているようだが、実は左から横書きに四・四・四・二の字配りで書くもの(一〜四十枚目)、左から縦書きに四・三・四・三の字配りで書くもの(四十一〜六十枚目)、右から縦書きに四・三・四・三の字配りで書くもの(六十一〜七十枚目)が混在する。順当な書字方向の札はわずかに十枚、その他を原則外の書字方向に書くことで、札をとる者の目をくらましているのである。恐らく、これではほとんど満足に遊べなかったのではあるまいか。

包紙と箱は、およそ五言かるたに同じ。包紙の枠内に「唐詩選加留多」、「七言絶句」「高山房」の印。箱の寸法は、蓋を閉めた状態で縦十・四糎、横十三・七糎、高さ八・三糎。なお久留米大学蔵品は包紙、元箱とも残るが、札の一部(読み札の第十八、取り札の第十八、四十五、五十)と箱の蓋を欠く。ただし刷りはよく、裏貼の水色がやや濃い。これに対して架蔵のものは、札の絵や文字の線が心なしか鈍い。幕末から明治の後刷りであろう。その代わりに札、包紙、元



(図九)

箱がすべて揃っている。また二つの札の山には薄茶色の紙製の帯がかかる。もともと備わるものかどうか分からないが、参考までに付記しておこう(図八・九)。

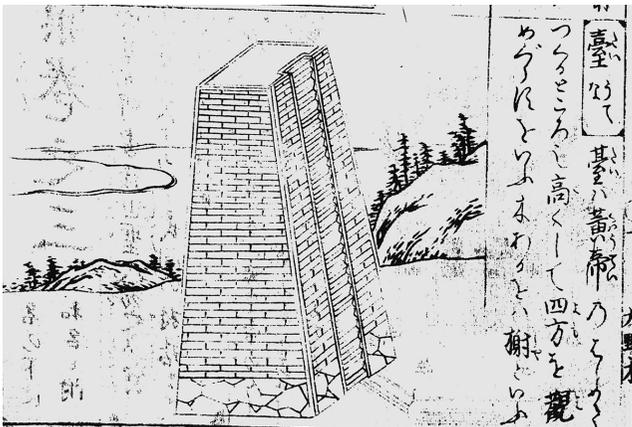


(図八)

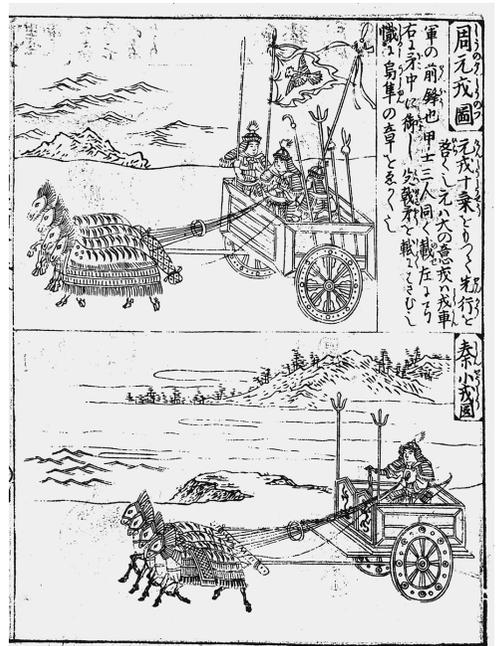
照合してみる。

第一、王勃「蜀中九日」の札。蜀(今の四川省)を旅する王勃が、重陽の節句(九月九日)に友人たちと詩を唱和したという「望郷台」(台は見晴らしのよい高い建物)を描くが、『画本』の四方に欄干がある壮麗な台とは全く違う。これは、後の札でもしばしば参照される平住専庵編、橘守国画『唐土訓蒙図彙』(享保四年刊)巻三「宮室」門の「台」の図に拠る(図十・十一)。

第二、杜審言「渡湘江」の札。杜審言が南方へ流される途中、湘江(湖南省を縦断して洞庭湖に入る川)を屋形船で渡る図柄。『画本』では杜審言一行が船へ向かっており、船には屋根もない。また承句「今春花鳥作三辺愁」(今春花鳥花鳥辺愁を作す)を表す景物として、札は若柳を、『画本』は一斉に



(図十一)『唐土訓蒙図彙』巻三「宮室」門、「台」図(架蔵)



(図十四)『唐土訓蒙図彙』卷八「器用」門、「周元戎図」「秦小戎図」

芽吹く草木を描いており、この点も一致しない(図十二)。

続く第三、杜審言「贈蘇綰書記」の札は、従軍して北方へ赴く蘇綰を送別する詩から、軍隊を連想して四頭の馬が引く兵車(戦闘に用いる車。戎車とも)を描く。これも『訓蒙図彙』に拠り、卷八の「器用」門に見える「周元戎図」と「秦小戎図」を合成する。武装して馬に乗る蘇綰を描いた『画本』とは全くの無縁(図十三・十四)。

と、ここまでは『画本』と関連がないどころか、『訓蒙図彙』のような他の書物に頼る図柄もある。しかし、第四の杜審言「戲贈趙使君美人」の札に進むと少し調子が変わり、美しく着飾って馬を走らせる女性(趙使君の妾)は、『画本』を参照したと思われる(図十五)。第五の

劉廷琦「銅雀台」の札も、『画本』の画面左奥の山々―魏の武帝(曹操)が建てた銅雀台の跡―を、第六の沈佺期「邙山」の札も、『画本』の画面左上の邙山―洛陽の北郊にある墓地として有名な山―のみを、それぞれ切り取って描いたか(図十六・十七)。これらは、ことさらに『画本』に拠らなくても描ける程度の類似と言えそうだが、七枚目以降の札にも『画本』とのかすかな交渉が点々と認められるのは、やはりこのかるたが『画本』二編にもとづきながら制作されていたことを物語っているようである。

第十七、李白「聞王昌齡左遷竜標尉遙有此寄」の札『画本』の画面手前に描かれる岩と楊柳を切り取るか(図十八)。

第十八、李白「黃鶴樓送孟浩然之広陵」の札『画本』の、凹凸がある外壁で囲まれた黃鶴樓と、遠くを行く帆船をほぼ踏襲する(図十九)。

第二十五、李白「与史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛」の札『画本』の画面左の凹凸がある外壁で囲まれた樓閣を切り取る(図二十)。

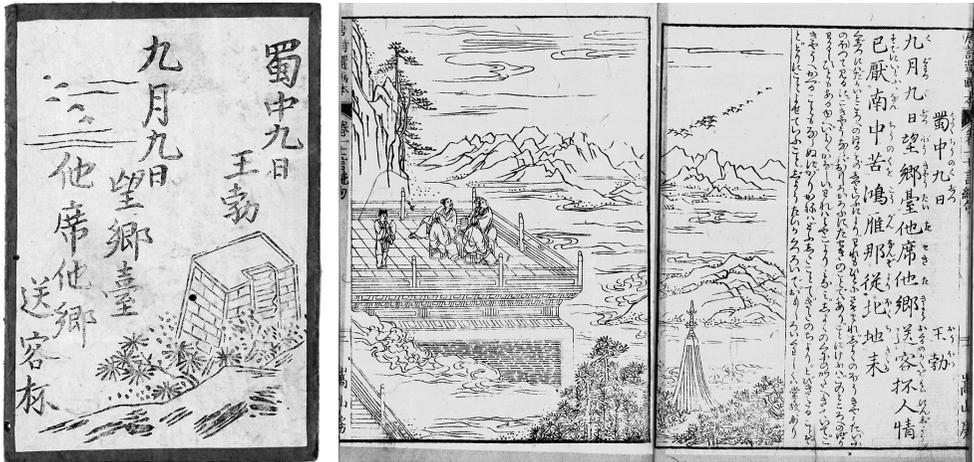
第二十六、李白「春夜洛城聞笛」の札

『画本』の画面左遠景に見える、城壁を切り取る。

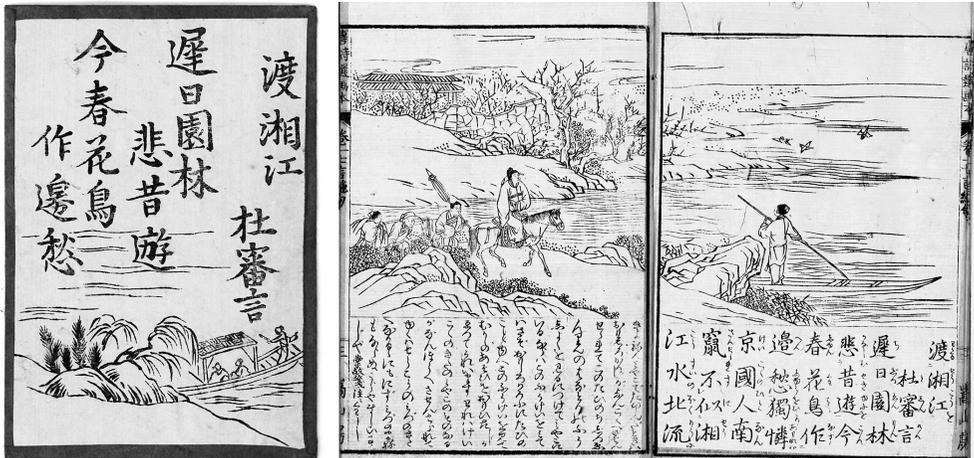
第二十七、王昌齡「春宮曲」の札

『画本』の画面奥に描かれる宮殿と月を切り取る。

第三十六、王昌齡「從軍行 其三」の札



(図十) 左：七言絶句かるた第1 右：『画本』二編卷一ウ・2オ「蜀中九日」  
(架蔵) (久留米大学御井図書館蔵)



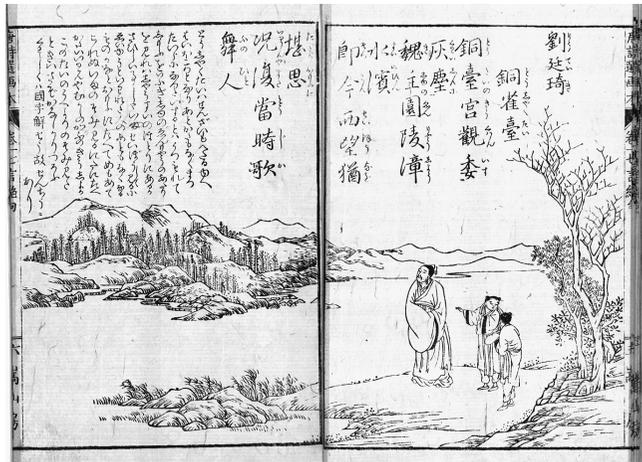
(図十二) 左：七言絶句かるた第2 右：『画本』二編卷一ウ・3オ「渡湘江」



(図十三) 左：七言絶句かるた第3 右：『画本』二編卷一ウ・4オ「贈蘇綰書記」



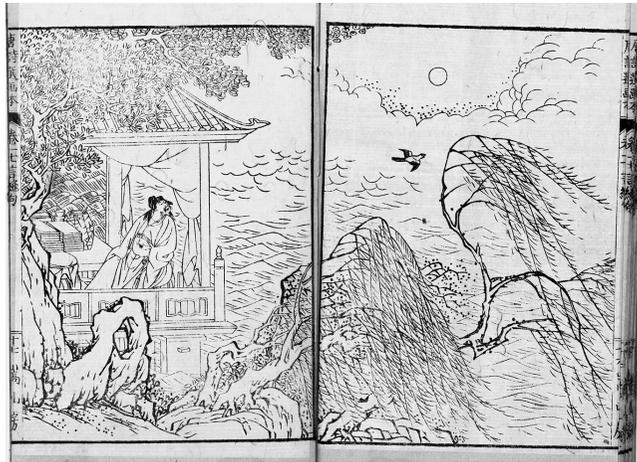
(図十五) 左：七言絶句かるた第4 右：『画本』二編卷一4ウ・5オ「戲贈趙使君美人」



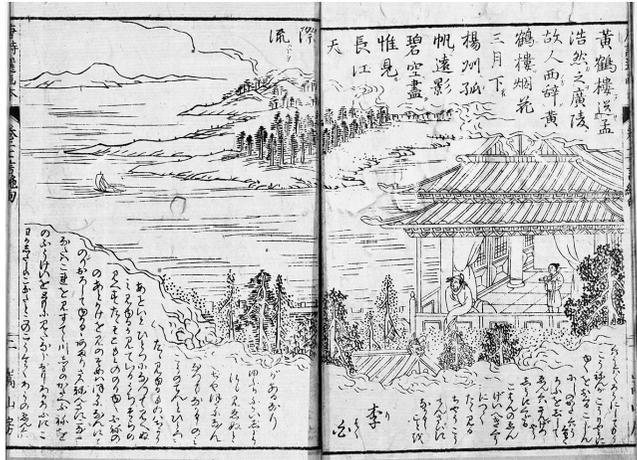
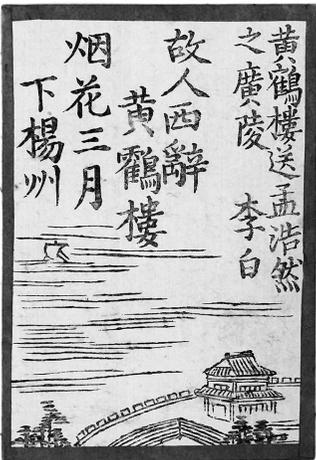
(図十六) 左：七言絶句かるた第5 右：『画本』二編卷一5ウ・6オ「銅雀台」



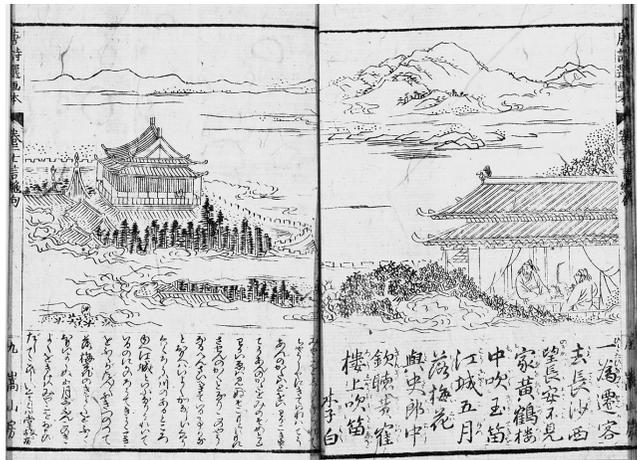
(図十七) 左：七言絶句かるた第6 右：『画本』二編卷一6ウ・7オ「邙山」



(図十八) 左：七言絶句かるた第17 右：『画本』二編卷一16ウ・17オ「聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄」



(図十九) 左：七言絶句かるた第18 右：『画本』二編卷二1ウ・2オ「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」



(図二十) 左：七言絶句かるた第25 右：『画本』二編卷二8ウ・9オ「與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛」

『画本』の絵の岩山（中央）、関所（左）、城壁（右）をモチーフとする。

第四十四、王維「九月九日憶三山中兄弟」の札

一見、無縁のようだが、居室の側に芭蕉と松を添えるのは、『画本』を踏まえるか。

第四十八、賈至「春思 其一」の札

『画本』の絵の背景に描かれる岩、楊柳、桃花を切り取る。

第五十三、賈至「岳陽樓重宴三王八員外貶三長沙」の札

『画本』の絵の遠景に見える、山々と水面を切り取る。

第六十二、岑参「赴三北庭一度隴思三家」の札

『画本』の松にとまる鸚鵡の図を単純化して踏襲する。

第六十五、岑参「山房春事」の札

『画本』の画面奥に描かれる、竹林に囲まれた山家とその上を飛ぶ鳥を切り取る。

とは言え、右以外の大半の札において『画本』の絵が捨てられ、新たな図柄が準備されたのは何故であろうか。その答えは結局、制作に当たった無名の画工の美的感覚によるといふことになるが、かるたの形態的な観点から考えて次のような理由も挙げられよう。七言のかるたは五言のそれに比べて読み札に記す字数が当然多くなる。加えて『唐詩選』の七言絶句には詩題が長いものも多く、その場合は絵を入れるスペースはさらに狭くなる。そうなると鈴木芙蓉が描く『画本』二編の精密な絵は、実に活用しづらいも

のであったに違いない。『画本』に拠らない札の図柄には、単なる山水だとか、山家だとか、楼閣だとか、さして詩意と関係するとは思われない略画を描くものが多い。第十五の李白「上皇西三巡南京歌 其一」の札（『唐土訓蒙図彙』卷八「器用」門の「大輅」と「玉輅」の図を合成する）や、第五十四の岑参「封大夫破三播仙三凱歌 其二」の札（同書卷三「宮室」門の「城」の一部を切り取る）のように、『訓蒙図彙』に拠るものも依然として見えている。同書の挿図は、文字の余白に入れる中国の文物風俗を描く小さな絵を準備するには、格好の粉本だったのであろう。あるいは、第五十八の岑参「逢三入三京使」  
と第六十一の岑参「送三入還三京」という近接する札に描かれたほぼ同じ図柄などは、五言絶句を絵解きした『画本』初編の儲光義「洛陽道」の



(図二十一) 七言絶句かるた第58・第61

六

嵩山房の四種のかるた、すなわち(1)五言絶句五十首全百枚、(2)五言絶句七十四首全百四十八枚、(3)七言絶句七十首全百四十枚、(4)七言絶句百首全二百枚のすべてが、『画本』に基づいて制作されていたであろうことを述べてきた。そこで、それぞれの形式で取り上げる詩を絵解きした『画本』の刊行年時と考え合わせると、(2)と(4)の刊行は、



(図二十二)『画本』初編巻二12ウ・13オ「洛陽道」

絵を参照したと見てよろしいか(図二十一・二十二)。詳しく見るならば、『画本』二編の外に拠り所を求めた例は更に多く見出されそうである。それらは、新たに多くの札絵を準備せざるを得なかった画工の苦心のあらわれである。

(2) 五言絶句七十四首全百四十八枚

∴ 『画本』初編が刊行された天明八年以降。

(4) 七言絶句百首全二百枚

∴ 『画本』の二編(寛政二年刊)と四編(寛政五年刊)が出揃った寛政五年以降。

と、ごくおおまかに見当が付けられよう。ここですでに提出しておいた嵩山房の広告を再び思い返すと、五言と七言の区分を記さない、

A「同(唐詩選) 絵入 詩かるた 箱入」

と、それを明記する、

B「同(唐詩選) 詩かるた画入 五言絶句 箱入

七言絶句 全」

という二様があった。これらは私の手許の資料という限られた範囲での調査だが、さらに見当を狭めるために、それぞれの広告の出現の時期を考える。Aの広告はただの一点、寛政八年刊行の宇野東山述『唐詩選解』の奥付の広告にか見出せない。その後に見れるのがBの広告で、これは文化四年刊行の小字素読本『唐詩選』の末尾に付される「嵩山房蔵板目録」に初めて現れ、かるたの広告としてはこれが幕末まで繰り返し掲載されている。

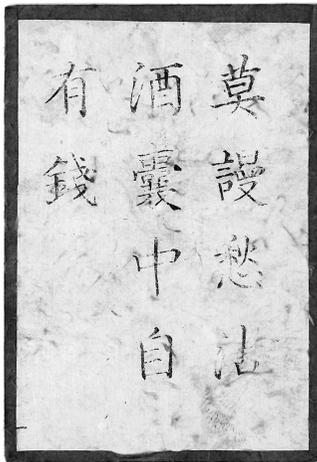
仮に、Aの広告を五言のかるただけを宣伝したものと考えれば、(2)五言絶句七十四首の刊行は天明八年から寛政八年の間、そして(4)七言絶句百首の刊行は寛政五年か

ら文化四年の間ということになる。Aの広告を五言と七言のかるたをまとめて単に「詩かるた」と呼んで宣伝したものと考えるなら、(2)(4)のかるたはともに、寛政五年から寛政八年の間には刊行されていたことなるう。いずれに考えても、『画本』各編との前後関係に矛盾をきたすこととはないが、少なくとも(2)の五言かるたが出来上がるには、『画本』初編が天明八年に出てなおしばらくの時間を要したと考えたほうがよさそうである。なお、(2)(4)の短縮版である(1)五言絶句五十首全百枚と(3)七言絶句七十首全百四十枚については、すでに述べたとおり、私は明治期の蔵版目録よりほかの文献に記された例を知らない。従ってこれらは明治に入つての刊行とも、また単なる短縮版であるから(2)(4)と同時の刊行とも、どちらに考えても何ら差し支えはない。

述べてきたように高山房の「唐詩選かるた」の残存例は多くはない。かつて編んだ図録を補足する意味もかねて、(2)五言絶句七十四首全百四十八枚と(3)七言絶句七十首全百四十枚のかるたの全写真を本稿の末に付しておく。前者は久留米大学御井図書館の蔵品、後者は架蔵のものである。

(付記) 資料搜索のうえで入口敦志氏、古賀知行氏には貴重な御教示をいただき、調査については大牟田市立三池カルタ・歴史資料

館、神戸女子大学・神戸女子短期大学須磨キャンパス図書館、中野区立歴史民俗資料館の各機関にご協力いただいた。また本稿をなすにあたり、矢毛達之氏に御助言をいただいた。記して深謝申し上げます。



1-2



1-1 賀知章「題袁氏別業」

○唐詩選かるた五言絶句七十四首

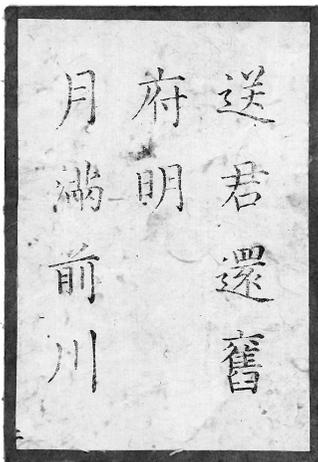
読み札・取り札各七十四枚 一箱

(近世後期) 刊

久留米大学御井図書館蔵



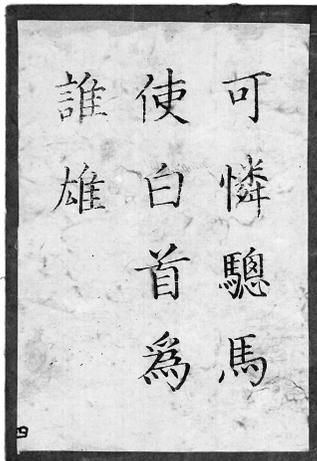
3-1 駱賓王「易水送別」



2-2



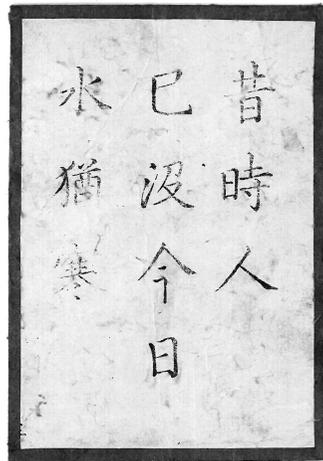
2-1 楊炯「夜送趙縱」



4-2



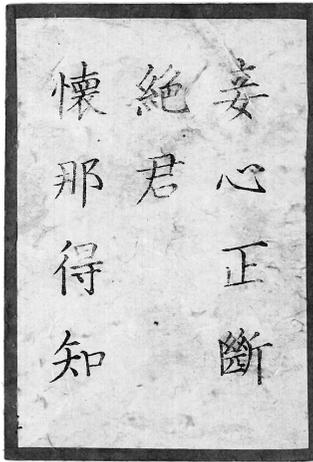
4-1 陳子昂「贈喬侍御」



3-2



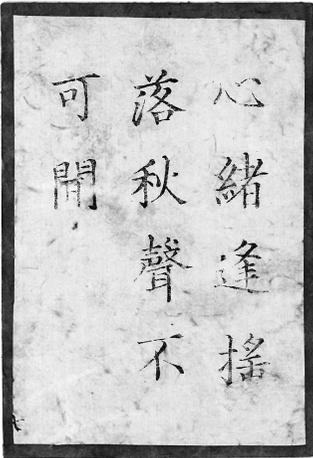
6-1 盧僊「南樓望」



5-2



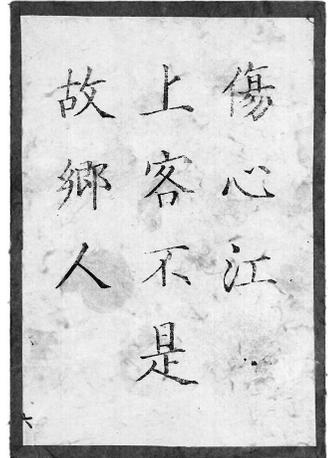
5-1 郭振「子夜春歌」



7-2



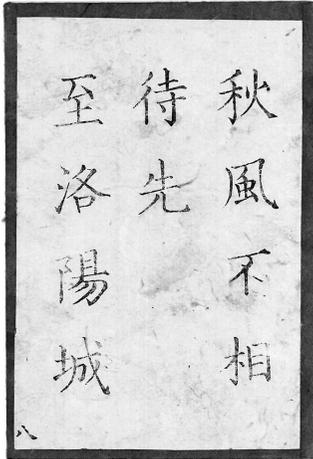
7-1 蘇頌「汾上驚秋」



6-2



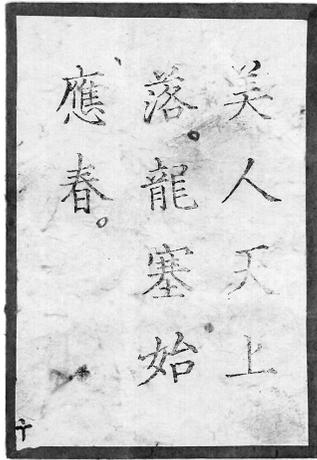
9-1 張九齡「照鏡見白髮」



8-2



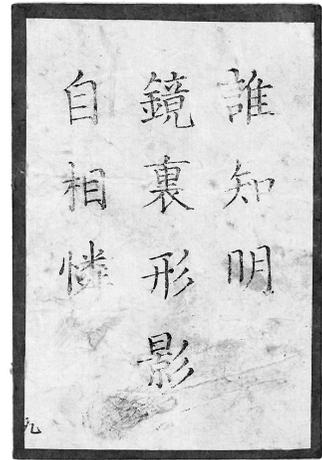
8-1 張說「蜀道後期」



10-2



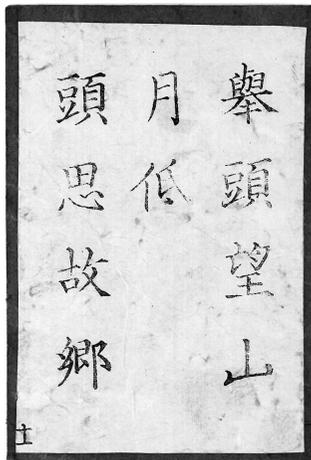
10-1 遜述「同洛陽李少府觀永樂公主入蕃」



9-2



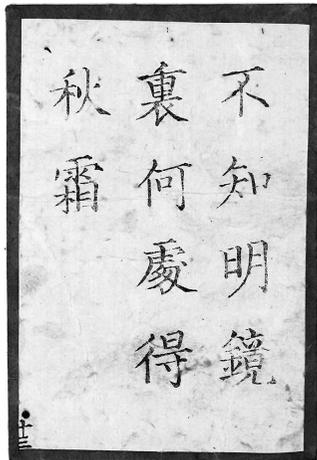
12-1 李白「怨情」



11-2



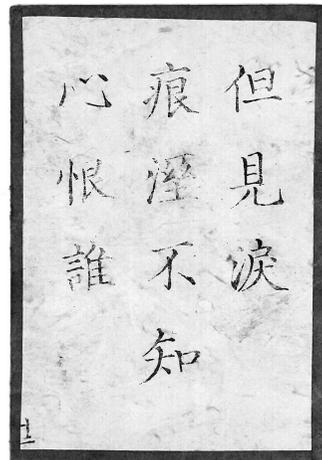
11-1 李白「静夜」



13-2



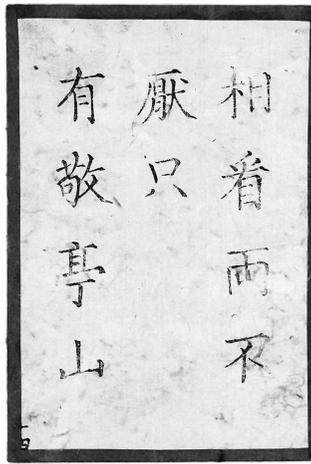
13-1 李白「秋浦歌」



12-2



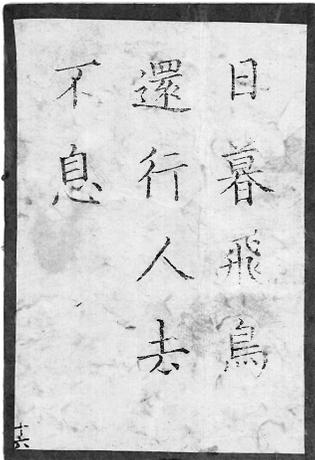
15-1 李白「見京兆韋參軍量移東陽」



14-2



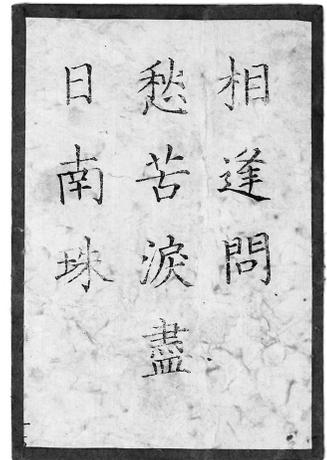
14-1 李白「獨坐敬亭山」



16-2



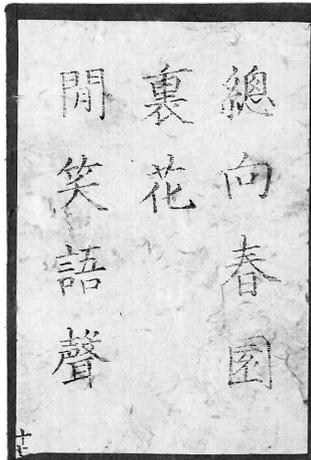
16-1 王維「臨高台」



15-2



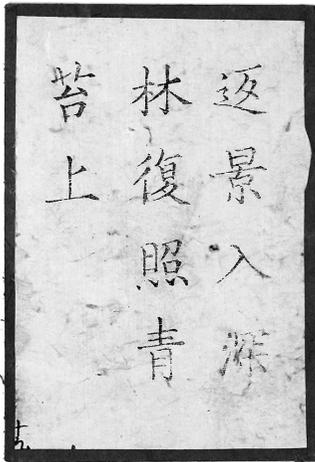
18-1 王維「雜詩」



17-2



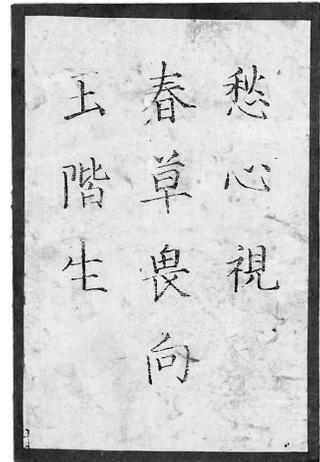
17-1 王維「班婕妤」



19-2



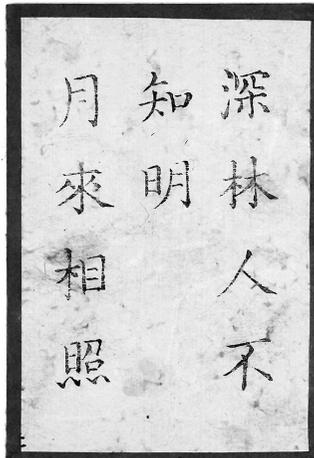
19-1 王維「鹿柴」



18-2



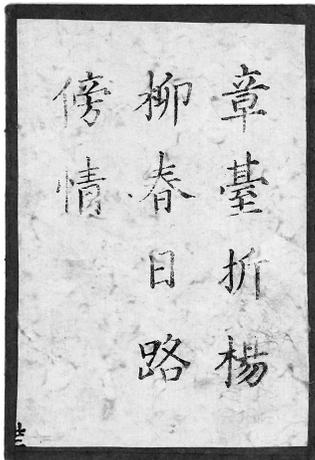
21-1 崔國輔「長信草」



20-2



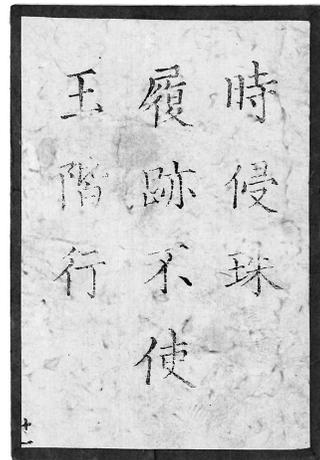
20-1 王維「竹里館」



22-2



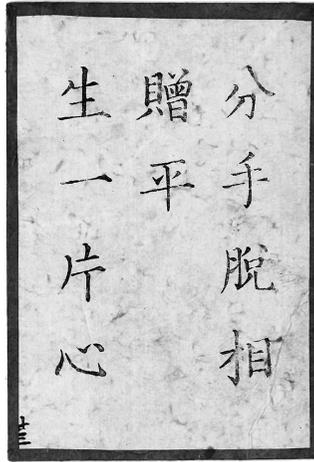
22-1 崔國輔「少年行」



21-2



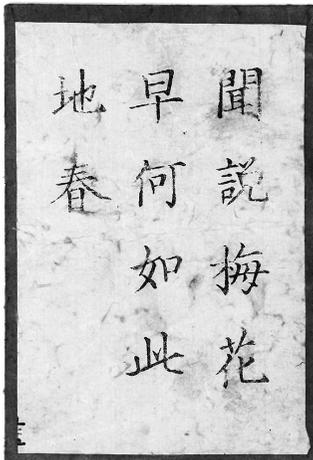
24-1 孟浩然「春曉」



23-2



23-1 孟浩然「送朱大入秦」



25-2



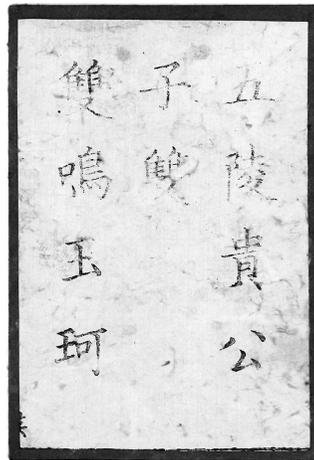
25-1 孟浩然「洛陽訪袁拾遺不遇」



24-2



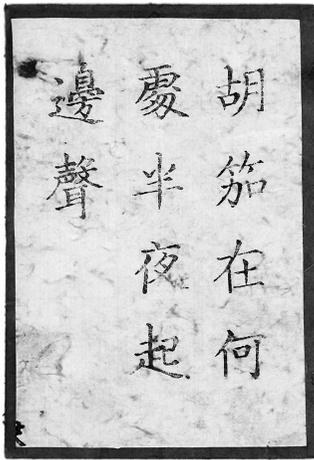
27-1 儲光義「長安道」



26-2



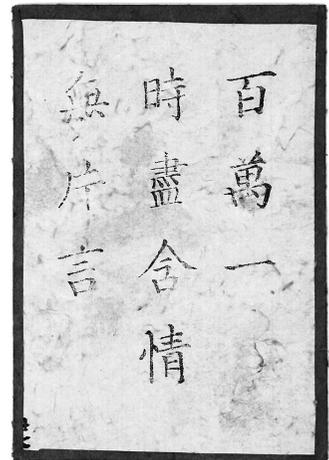
26-1 儲光義「洛陽道」



28-2



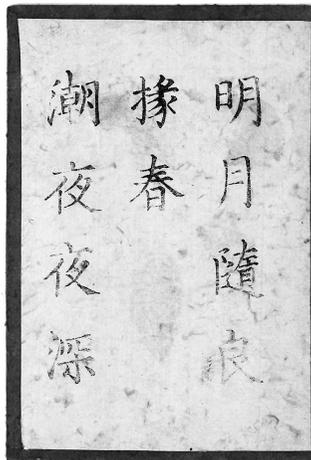
28-1 儲光義「関山月」



27-2



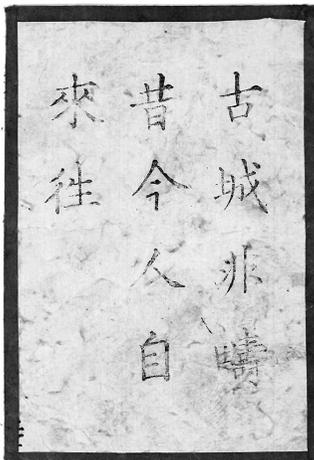
30-1 王昌齡「答武陵田太守」



29-2



29-1 王昌齡「送郭司倉」



31-2



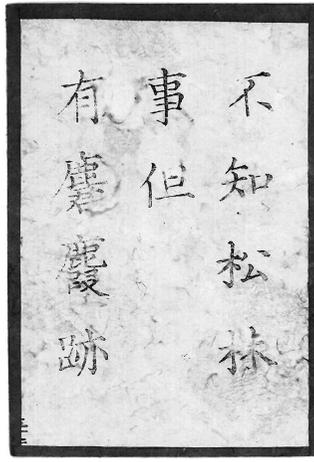
31-1 裴迪「孟城坳」



30-2



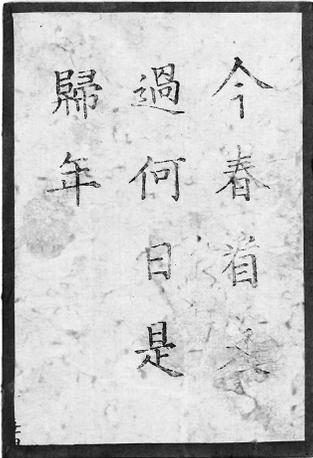
33-1 杜甫「復愁」



32-2



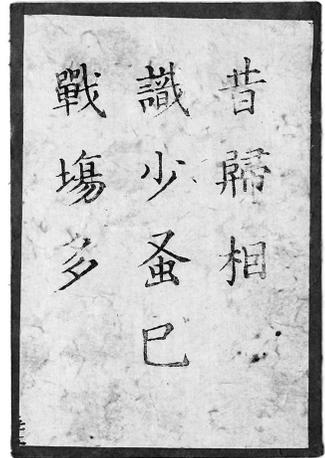
32-1 裴迪「鹿柴」



34-2



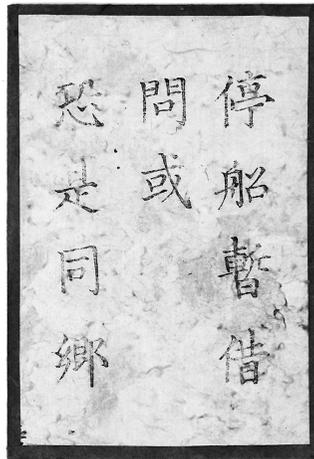
34-1 杜甫「絕句」



33-2



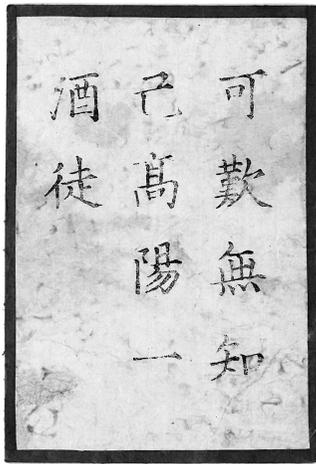
36-1 高適「詠史」



35-2



35-1 崔顥「長干行」



37-2



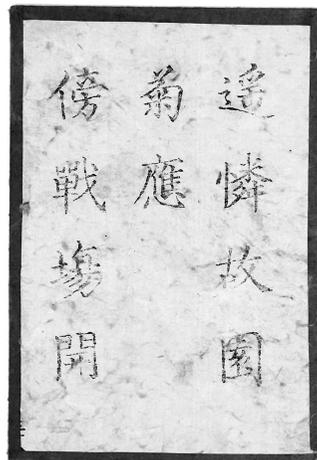
37-1 高適「田家春望」



36-2



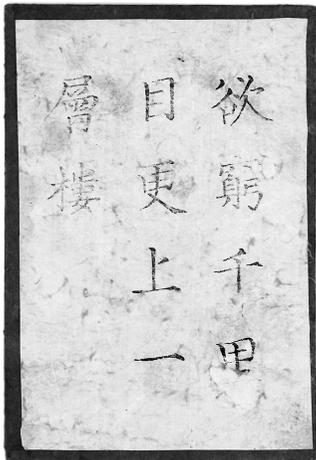
39-1 岑參「見渭水思秦川」



38-2



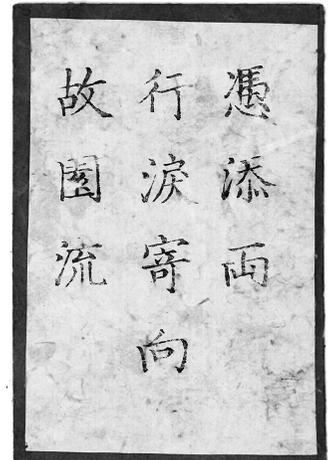
38-1 岑參「行軍九日思長安故園」



40-2



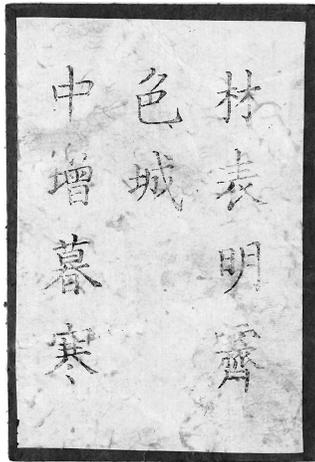
40-1 王之渙「登鶴鵲樓」



39-2



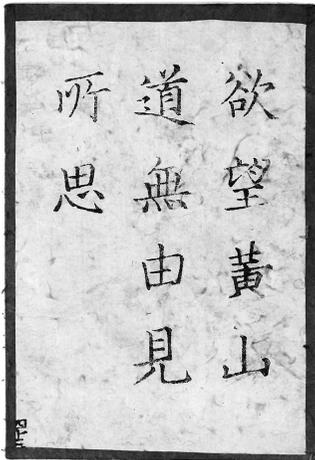
42-1 李適之「罷相作」



41-2



41-1 祖詠「終南望餘雪」



43-2



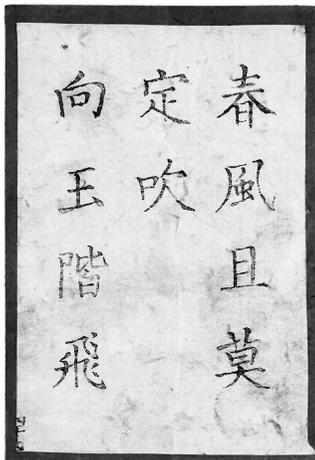
43-1 李頎「奉送五叔入京兼寄綦母三」



42-2



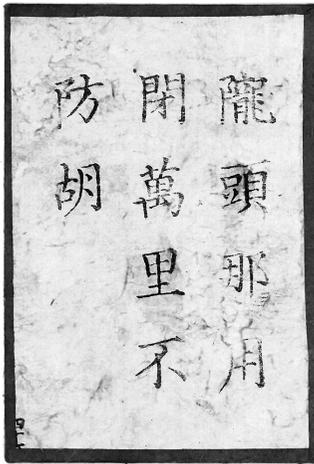
45-1 蕭穎士「九日陪元魯山登北城留別」



44-2



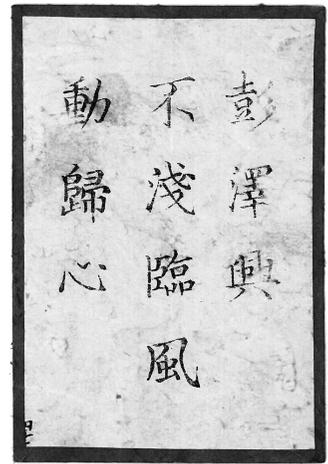
44-1 丘為「左掖梨花」



46-2



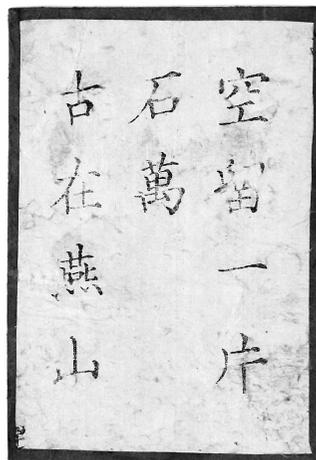
46-1 劉長卿「平蕃曲 其一」



45-2



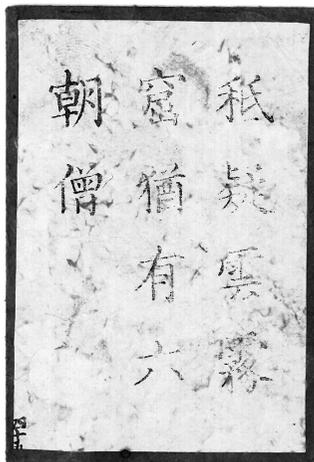
48-1 錢起「逢俠者」



47-2



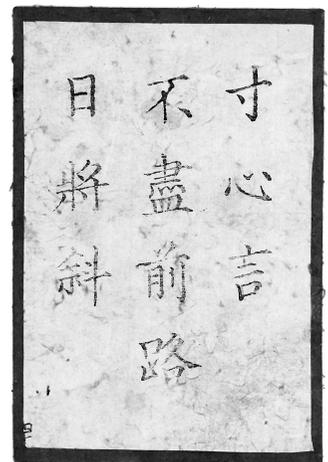
47-1 劉長卿「平蕃曲 其二」



49-2



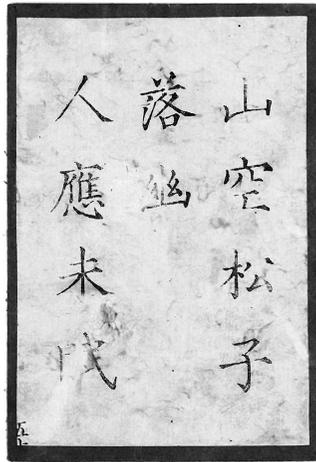
49-1 錢起「江行無題」



48-2



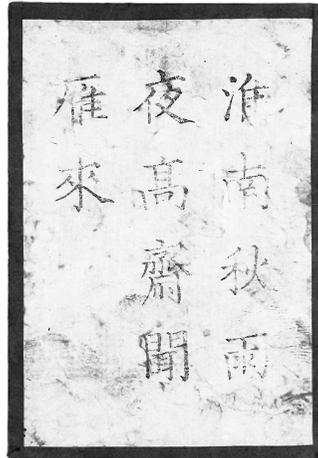
51-1 韋應物「聽江笛送陸侍御」



50-2



50-1 韋應物「秋夜寄丘二十二員外」



52-2



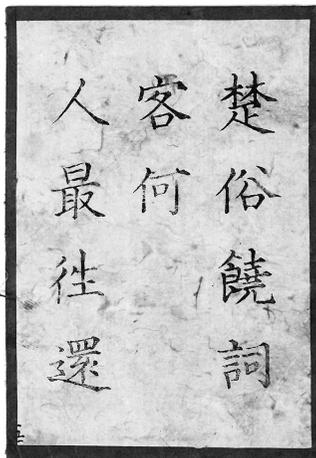
52-1 韋應物「聞雁」



51-2



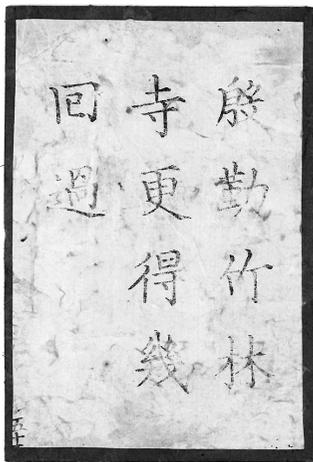
54-1 皇甫冉「婕妤怨」



53-2



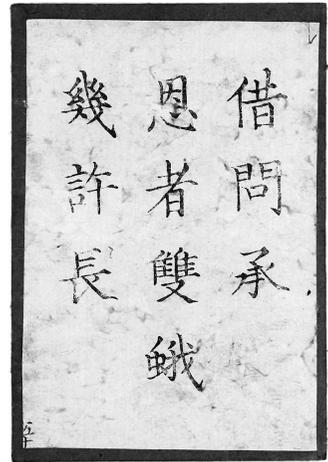
53-1 韋應物「答李濟」



55-2



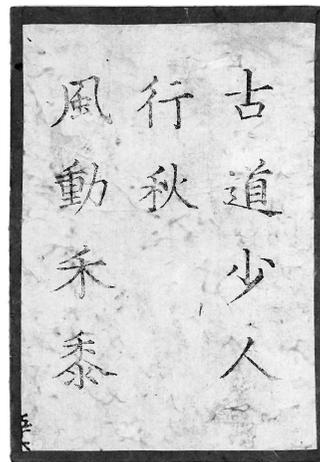
55-1 朱放「題竹林寺」



54-2



57-1 盧綸「和張僕射塞下曲」



56-2



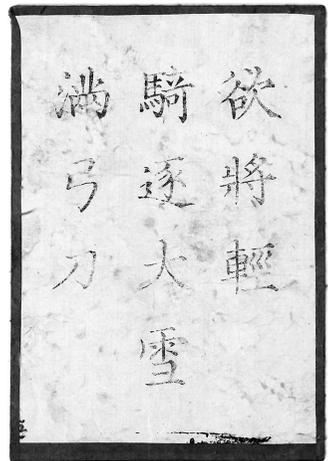
56-1 耿湜「秋日」



58-2



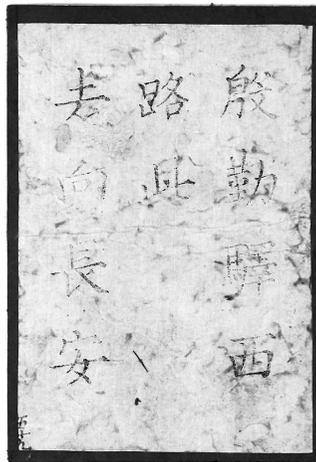
58-1 司空曙「別盧秦卿」



57-2



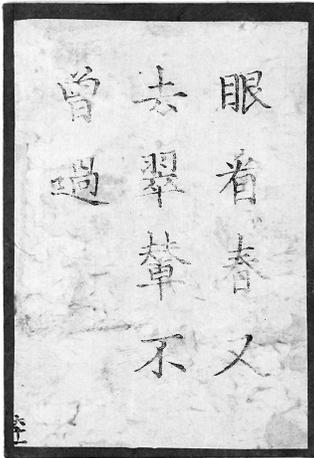
60-1 戴叔倫「三閭廟」



59-2



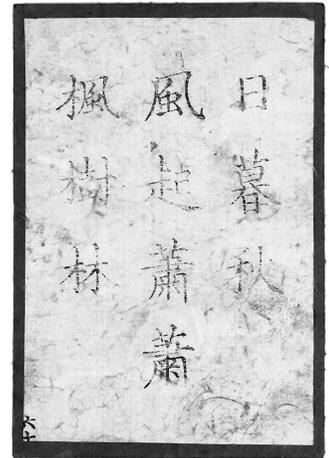
59-1 李益「幽州」



61-2



61-1 令狐楚「思君恩」



60-2



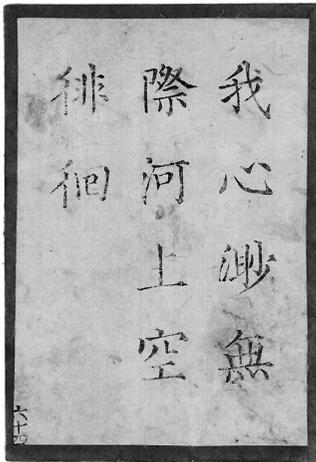
63-1 劉禹錫「秋風引」



62-2



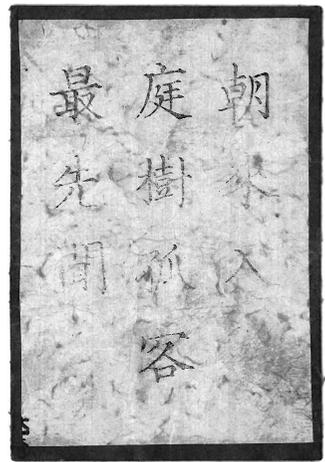
62-1 柳宗元「登柳州蛾山」



64-2



64-1 呂温「輦路感懷」



63-2



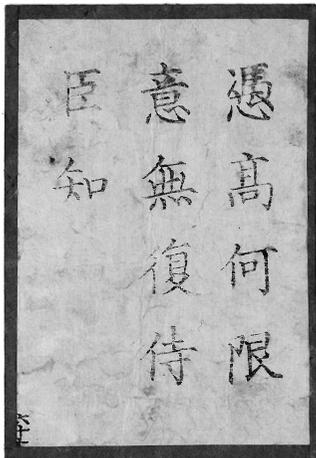
66-1 賈島「尋隱者不遇」



65-2



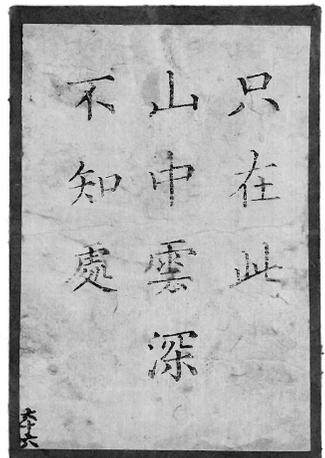
65-1 孟郊「古別離」



67-2



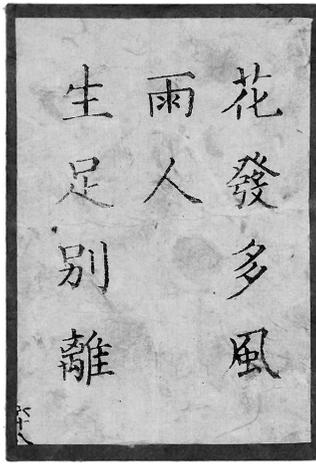
67-1 文宗皇帝「宮中題」



66-2



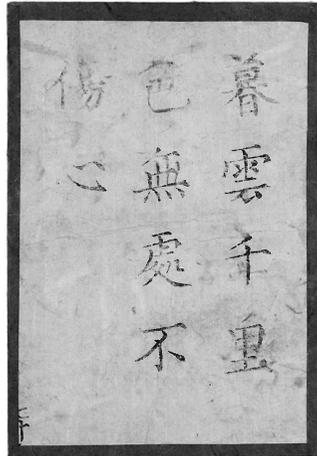
69-1 薛瑩「秋日湖上」



68-2



68-1 于武陵「勸酒」



70-2



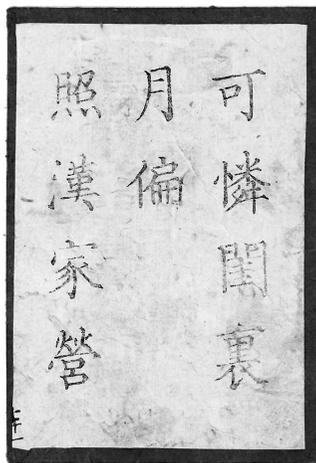
70-1 荆叔「題慈恩塔」



69-2



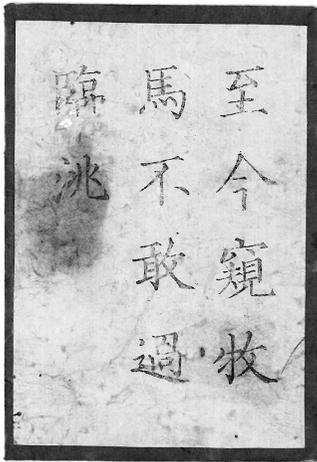
72-1 無名氏「伊州歌 其二」



71-2



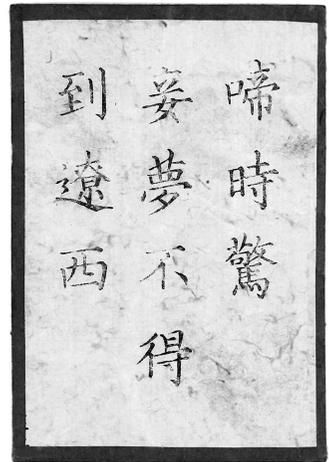
71-1 無名氏「伊州歌 其一」



73-2



73-1 西鄙人「哥舒歌」



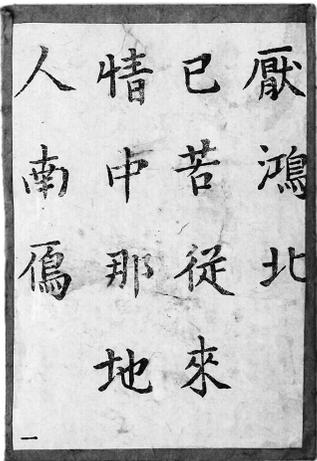
72-2



74-2



74-1 太上隱者「答人」



1-2



1-1 王勃「蜀中九日」

○唐詩選かるた七言絶句七十首

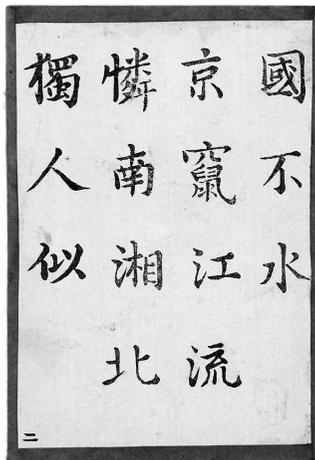
読み札・取り札各七十枚 一箱

(近世後期) 刊

架蔵



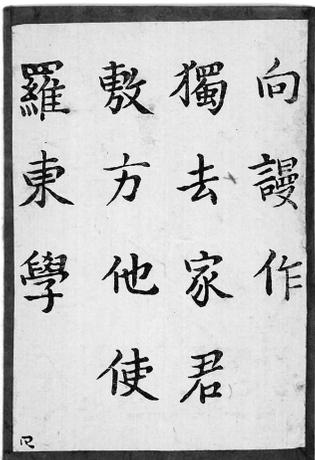
3-1 杜審言「贈蘇館書記」



2-2



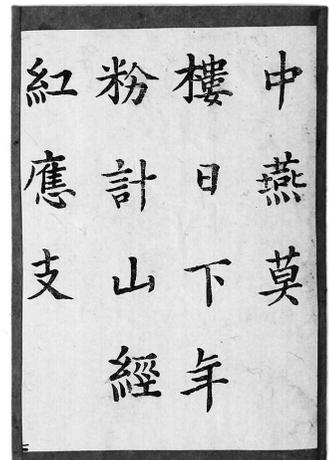
2-1 杜審言「渡湘江」



4-2



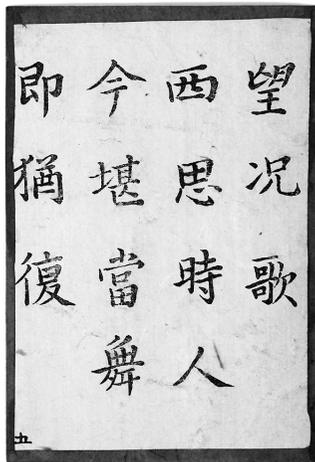
4-1 杜審言「戲贈趙使君美人」



3-2



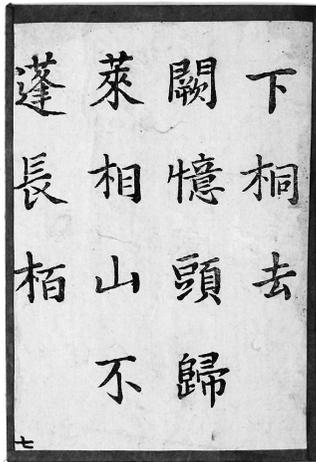
6-1 沈佺期「邛山」



5-2



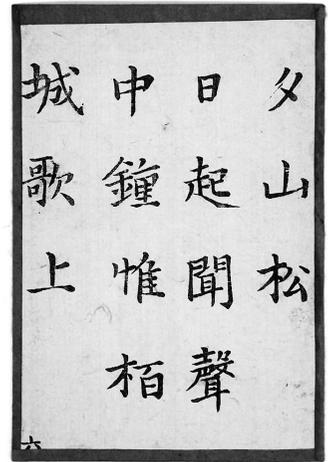
5-1 劉廷琦「銅雀台」



7-2



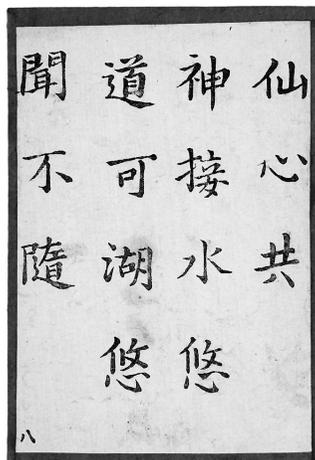
7-1 宋之問「送司馬道士遊天台」



6-2



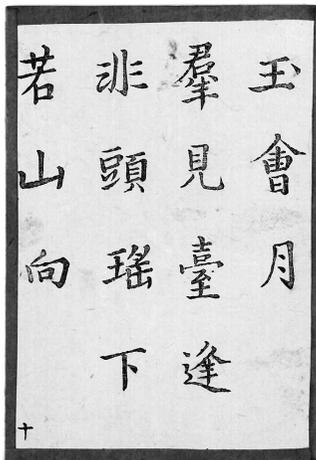
9-1 王翰「涼州詞」



8-2



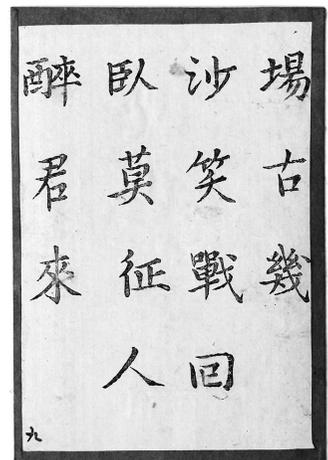
8-1 張說「送梁六」



10-2



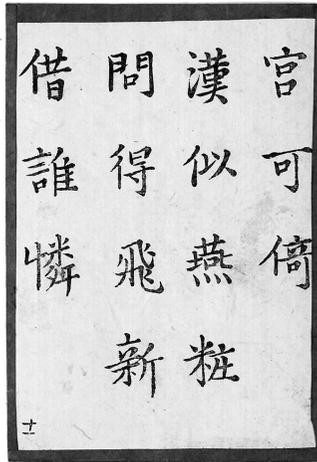
10-1 李白「清平調詞 其一」



9-2



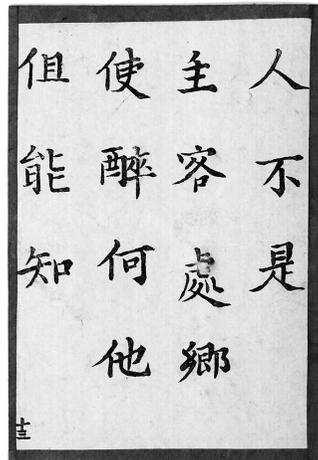
12-1 李白「清平調詞 其三」



11-2



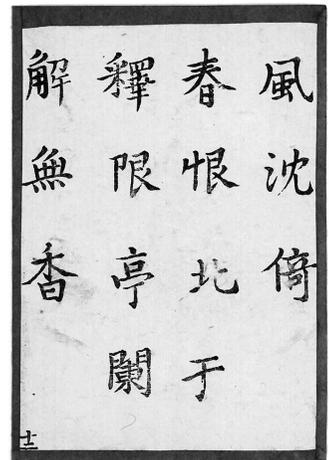
11-1 李白「清平調詞 其二」



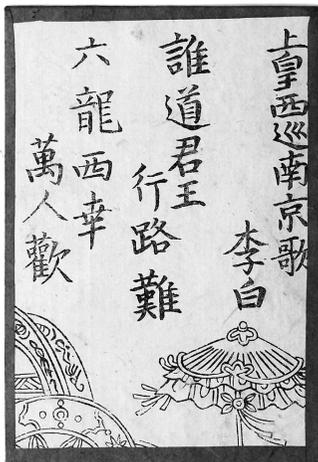
13-2



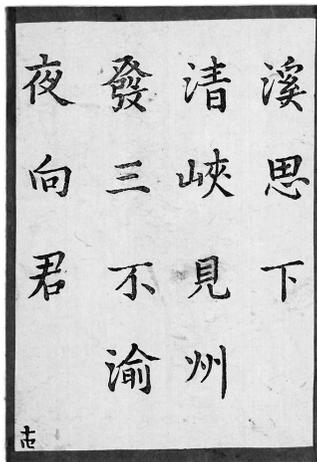
13-1 李白「客中行」



12-2



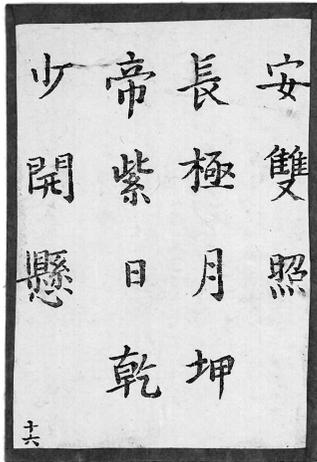
15-1 李白「上皇西巡南京歌 其一」



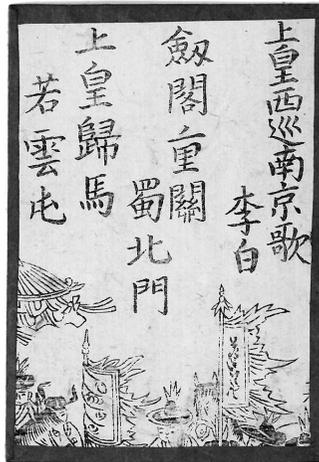
14-2



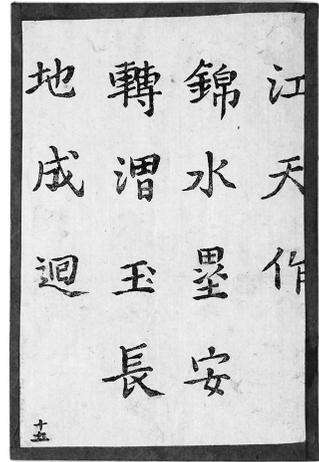
14-1 李白「峨眉山人月歌」



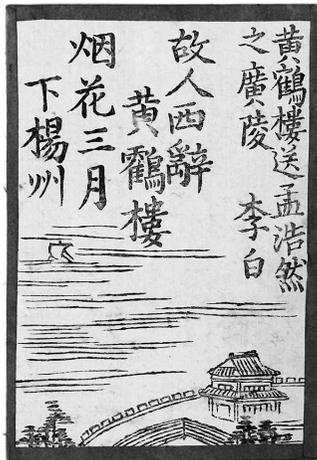
16-2



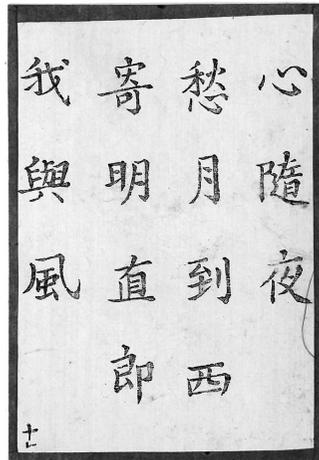
16-1 李白「上皇西巡南京歌 其二」



15-2



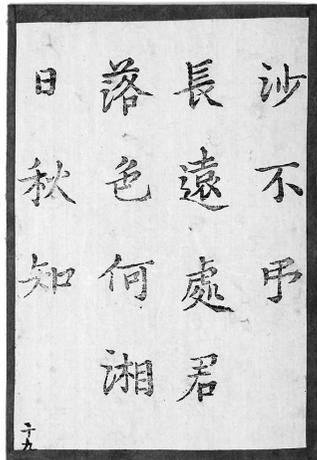
18-1 李白「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」



17-2



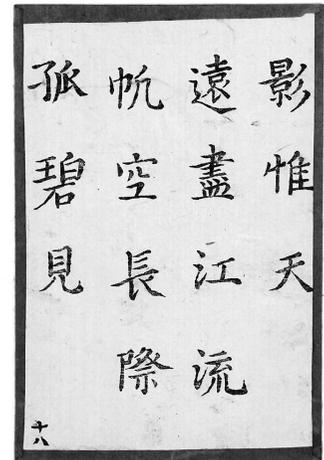
17-1 李白「聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄」



19-2



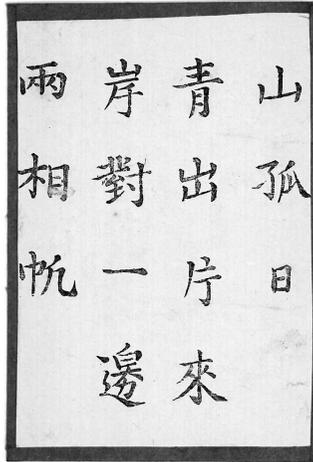
19-1 李白「陪族叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至遊洞庭湖」



18-2



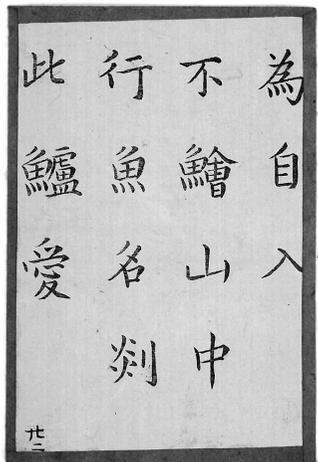
21-1 李白「早發白帝城」



20-2



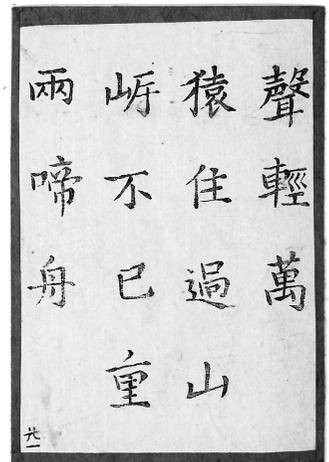
20-1 李白「望天門山」



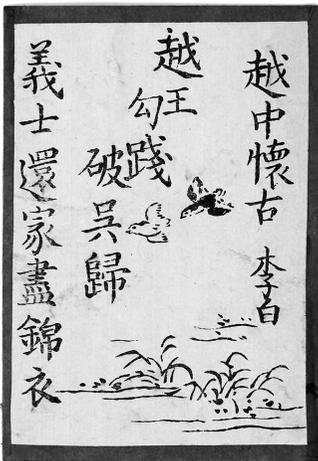
22-2



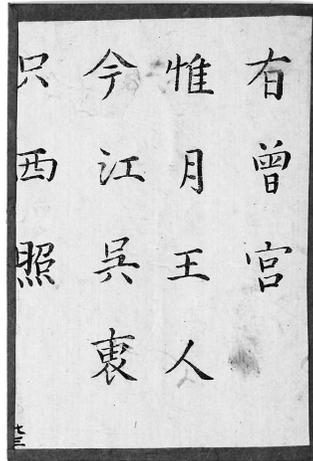
22-1 李白「秋下荆門」



21-2



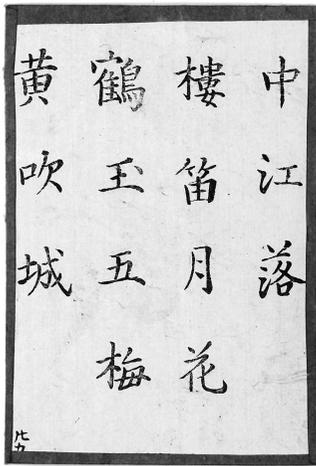
24-1 李白「越中懷古」



23-2



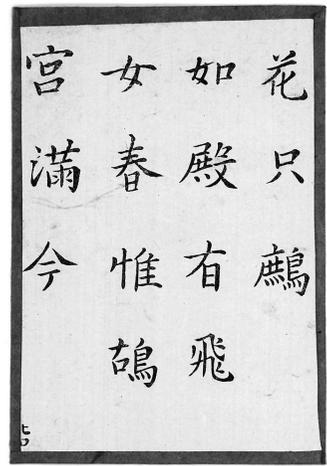
23-1 李白「蘇台覽古」



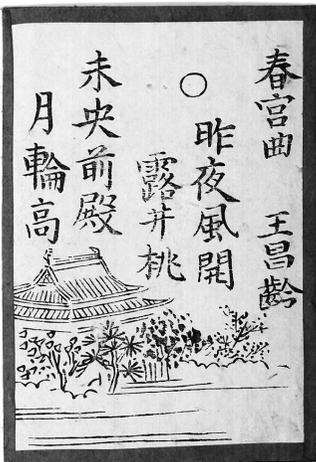
25-2



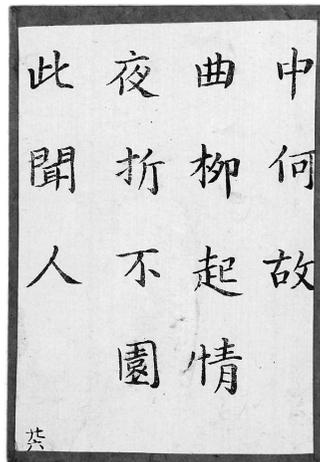
25-1 李白「與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛」



24-2



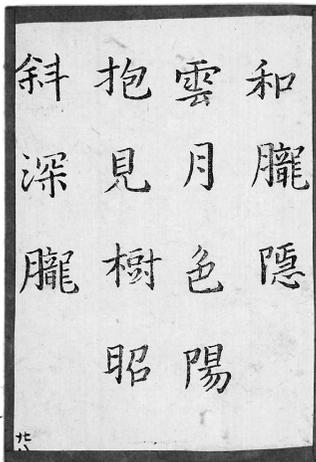
27-1 王昌齡「春宮曲」



26-2



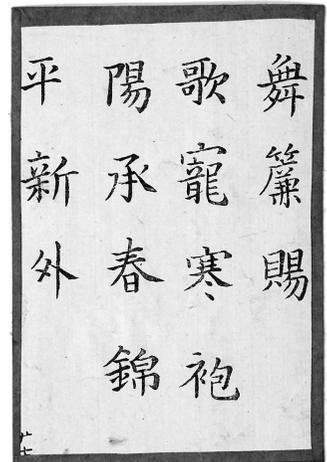
26-1 李白「春夜洛城聞笛」



28-2



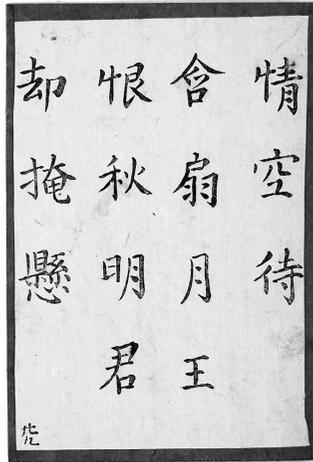
28-1 王昌齡「西宮春怨」



27-2



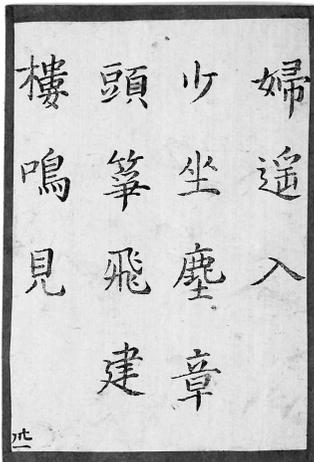
30-1 王昌齡「長信秋詞」



29-2



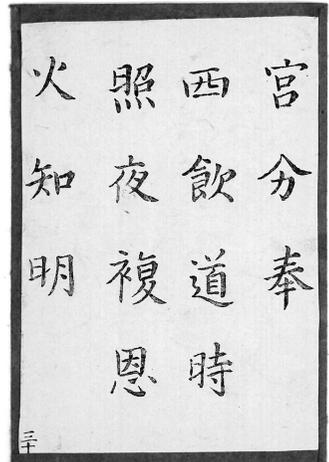
29-1 王昌齡「西宮秋怨」



31-2



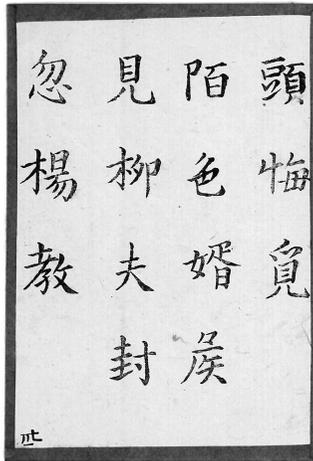
31-1 王昌齡「青樓曲」



30-2



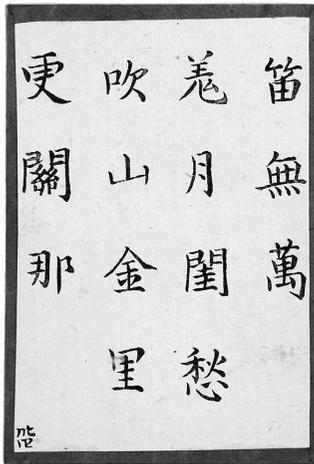
33-1 王昌齡「出塞行」



32-2



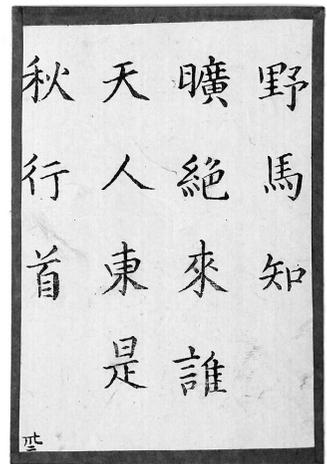
32-1 王昌齡「閨怨」



34-2



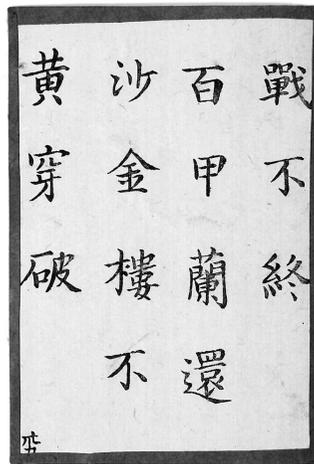
34-1 王昌齡「從軍行 其一」



33-2



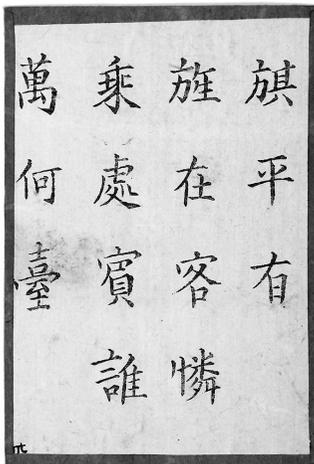
36-1 王昌齡「從軍行 其三」



35-2



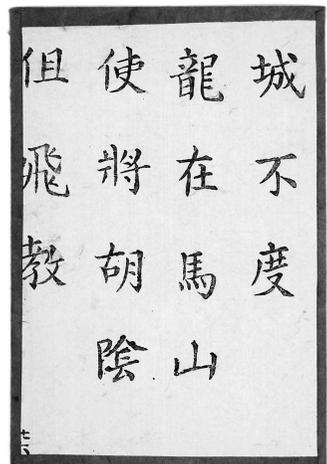
35-1 王昌齡「從軍行 其二」



37-2



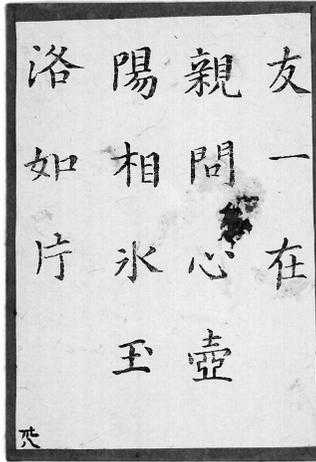
37-1 王昌齡「梁苑」



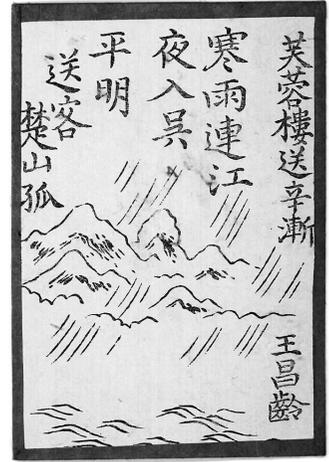
36-2



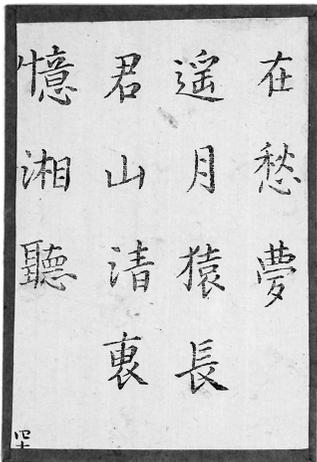
39-1 王昌齡「送薛大赴安陸」



38-2



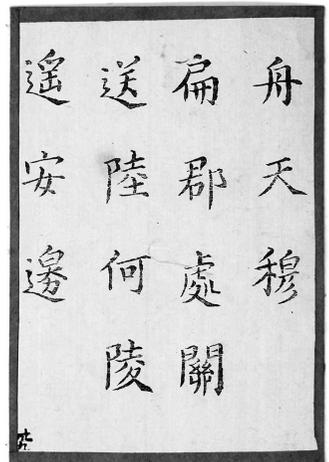
38-1 王昌齡「芙蓉樓送辛漸」



40-2



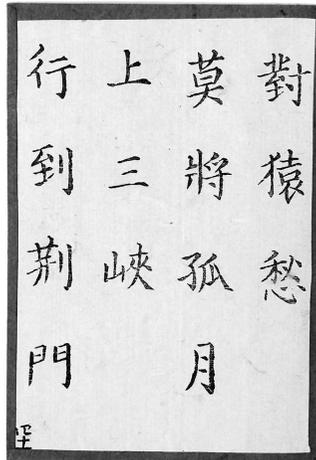
40-1 王昌齡「送別魏三」



39-2



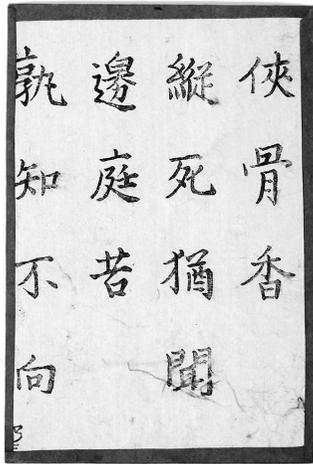
42-1 王昌齡「重別李評事」



41-2



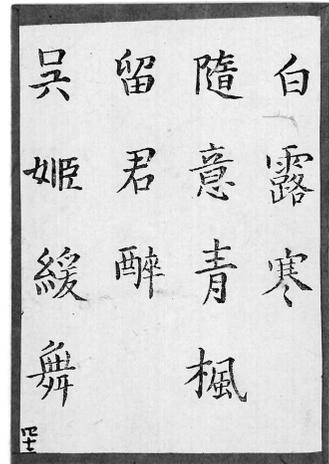
41-1 王昌齡「盧溪別人」



43-2



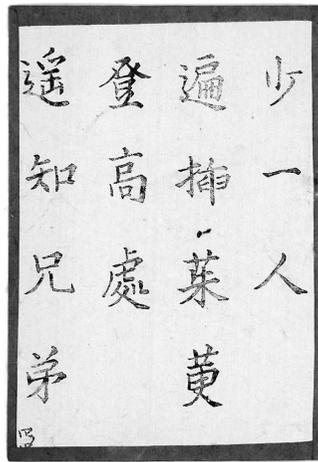
43-1 王維「少年行」



42-2



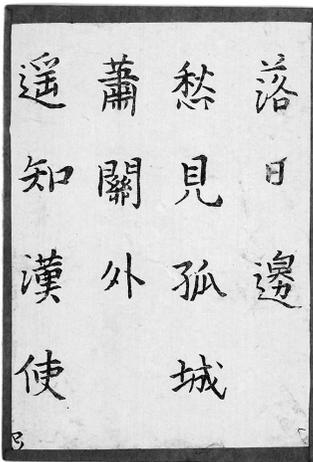
45-1 王維「與盧員外象過崔處士興宗林亭」



44-2



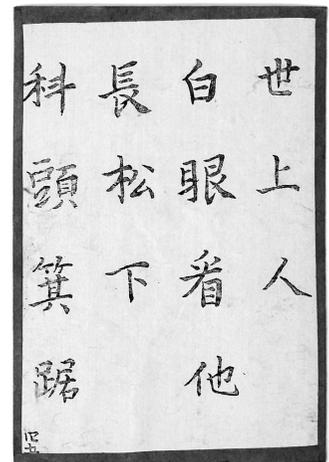
44-1 王維「九月九日憶山中兄弟」



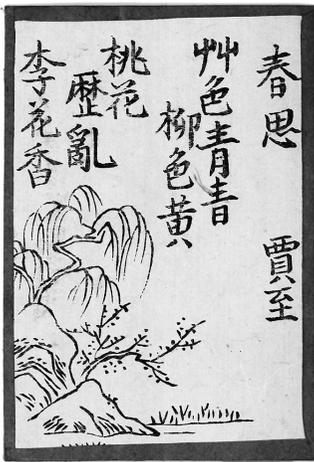
46-2



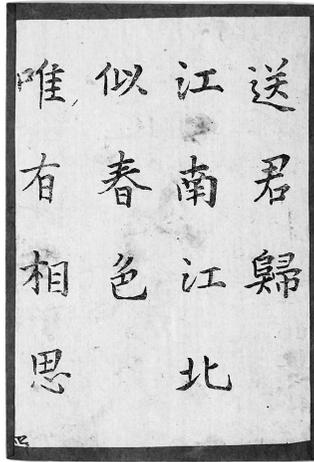
46-1 王維「送韋評事」



45-2



48-1 賈至「春思 其一」



47-2



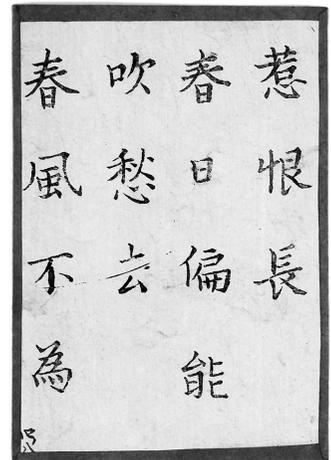
47-1 王維「送沈子福之江南」



49-2



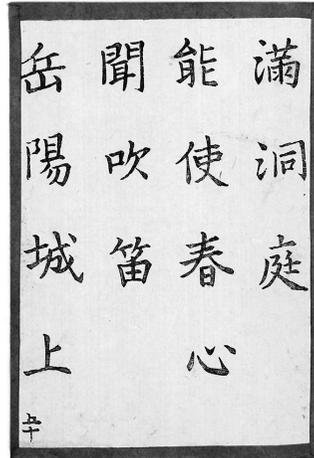
49-1 賈至「春思 其二」



48-2



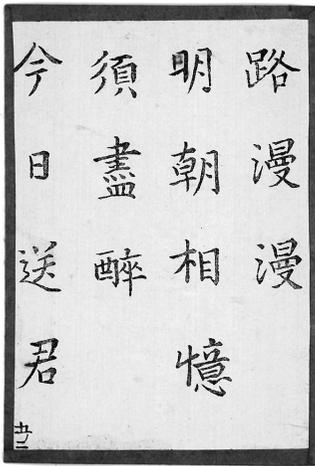
51-1 賈至「初至巴陵與李十二白同泛洞庭湖」



50-2



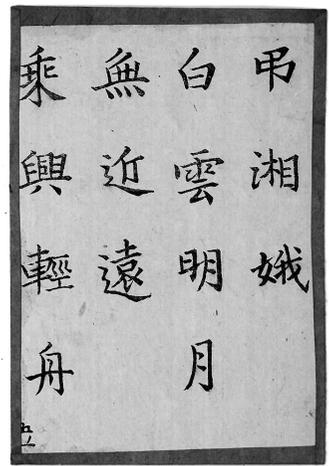
50-1 賈至「西亭春望」



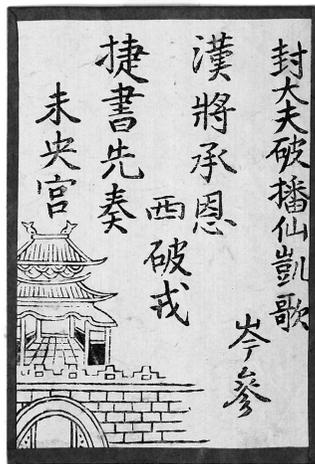
52-2



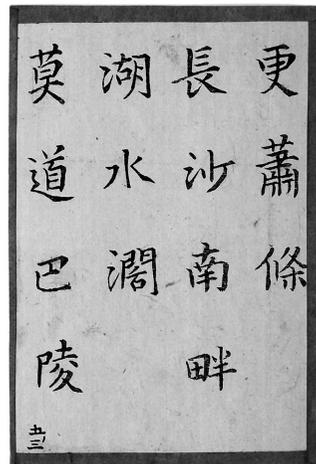
52-1 賈至「送李侍郎赴常州」



51-2



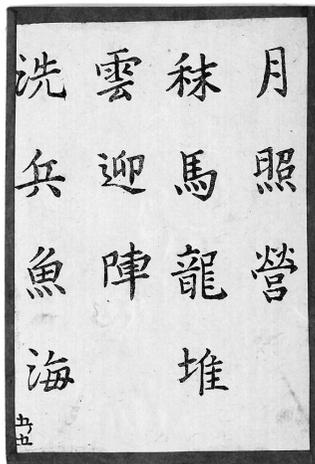
54-1 岑參「封大夫破播仙凱歌 其一」



53-2



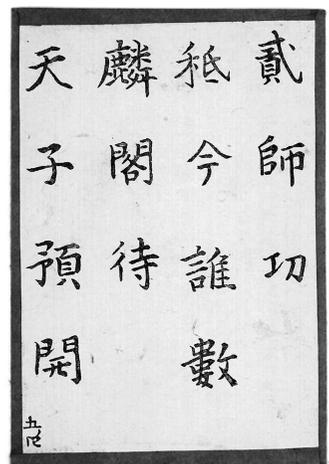
53-1 賈至「岳陽樓重宴別王八員外賈長沙」



55-2



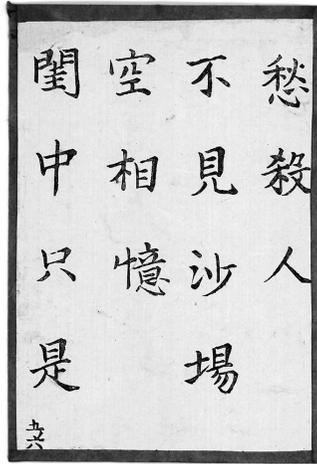
55-1 岑參「封大夫破播仙凱歌 其二」



54-2



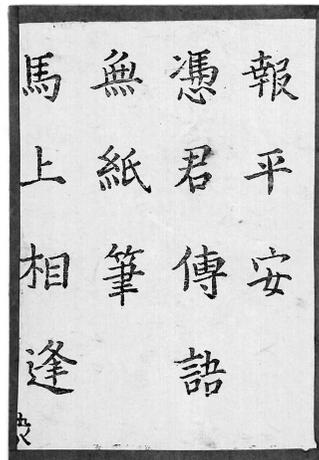
57-1 岑參「玉関寄長安李主簿」



56-2



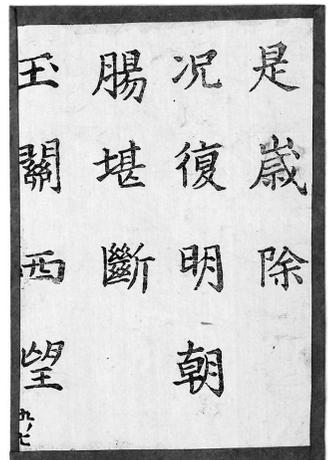
56-1 岑參「首蓿烽寄家人」



58-2



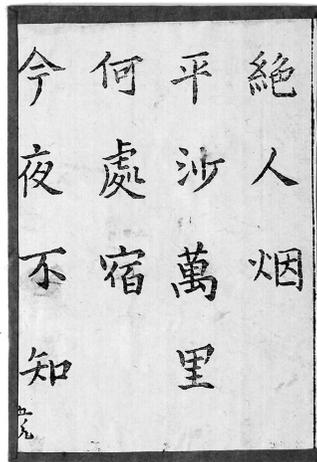
58-1 岑參「逢入京使」



57-2



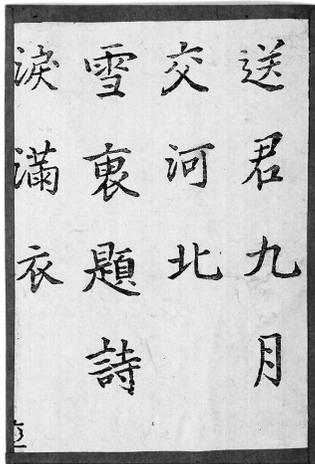
60-1 岑參「虢州後亭送李判官使赴晉絳得秋字」



59-2



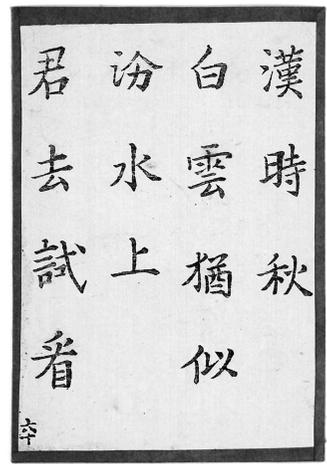
59-1 岑參「磧中作」



61-2



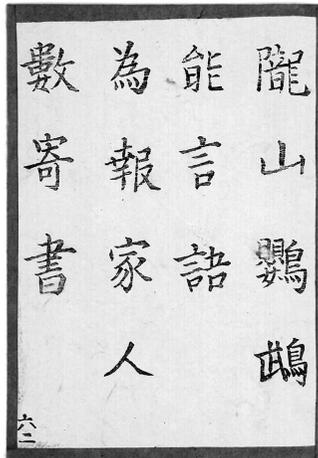
61-1 岑参「送人還京」



60-2



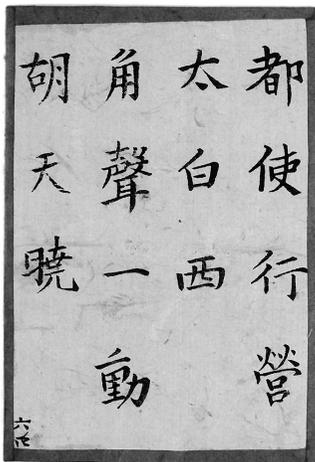
63-1 岑参「酒泉太守席上醉後作」



62-2



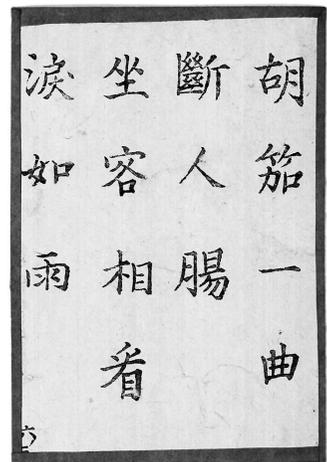
62-1 岑参「赴北庭度隴思家」



64-2



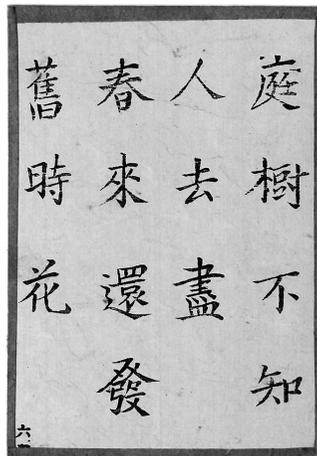
64-1 岑参「送劉判官赴磧西」



63-2



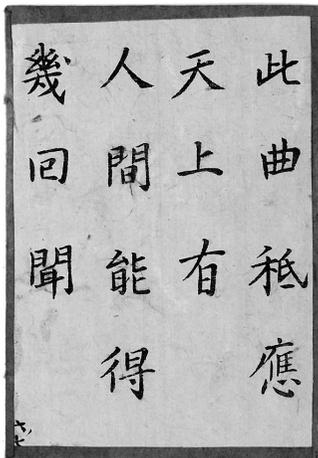
66-1 儲光義「寄孫山人」



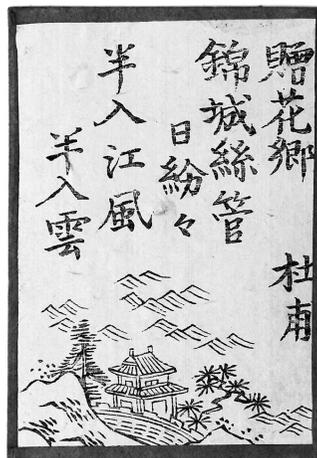
65-2



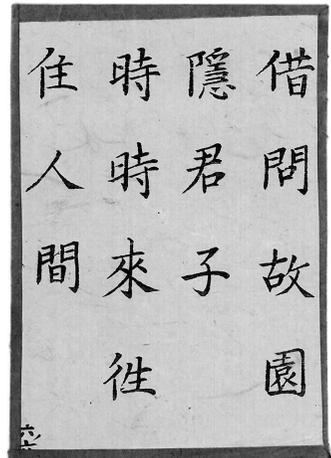
65-1 岑參「山房春事」



67-2



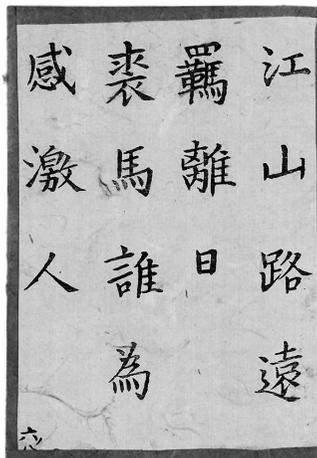
67-1 杜甫「贈花卿」



66-2



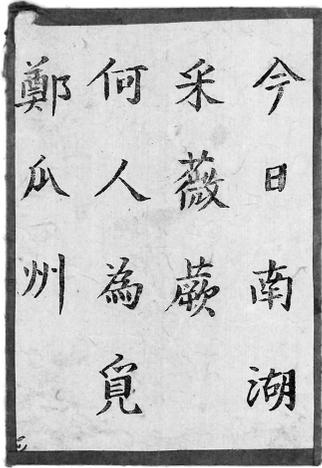
69-1 杜甫「奉和嚴武軍城早秋」



68-2



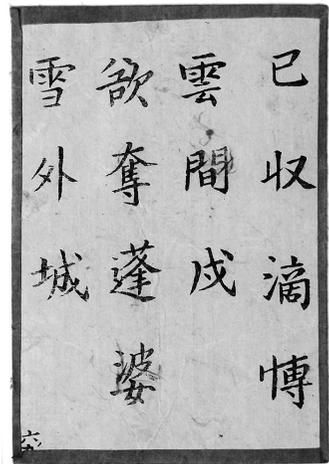
68-1 杜甫「重贈鄭鍊」



70-2



70-1 杜甫「解悶」



69-2

